

佐和山城跡Ⅱ・六反田遺跡Ⅰ

— 鉄塔建替工事に伴う発掘調査 —



平成 24 年 2 月

彦根市教育委員会

目 次

例言

はじめに	1
位置と環境	1
第1章 佐和山城跡	
遺構と遺物	3
調査の成果	11
第2章 六反田遺跡	
遺構と遺物	12
調査の成果	17
写真図版	

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が平成22年度に行った、鉄塔建替工事に伴う事前の発掘調査の成果を収めたものである。
2. 本調査の調査地は、彦根市佐和山町地先および宮田町に位置する。
3. 本調査は、現地調査を平成22年12月6日～平成23年1月12日の間実施し、のちに整理調査を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会事務局文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。
文化財部長：谷口 徹 次長兼課長：上田博司
課長補佐(兼文化財係長)：久保達彦
係 長：北川恭子 副 主 査：池田隼人
主 任：深谷 覚 主 任：辻 嘉光
主 任：森下雅子 主 任：林 昭男
主 任：三尾次郎 技 師：戸塚洋輔
技 師：田中良輔 技 師：下高大輔
臨時職員：佃昌幸
5. 本調査には以下の諸氏が参加した。
(発掘調査) 榎木規秀 久保亮二 辻節夫 友田勇 中田鉄雄 西村朝男
野瀬善一 前田宏(五十音順・敬称略)
(整理調査) 市田政子 川崎浄子 佃昌幸
6. 本書の執筆及び編集は田中良輔が行った。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8. 本書の作成にあたり、以下の方々や機関からの助言・協力を得た。
瀬口眞司 堀真人 財団法人滋賀県文化財保護協会
9. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

はじめに

本書は、民間による鉄塔建替工事に伴って実施した、佐和山城跡Ⅱ次調査(彦根市佐和山町地先)および六反田遺跡Ⅰ次調査(彦根市宮田町地先)の発掘調査成果をまとめたものである。調査は、平成22年12月6日から平成23年1月12日まで現地調査を実施し、その後、整理調査を行い本報告書の刊行となった。

位置と環境

[地理的環境]

今回の調査地は、彦根市北東部の佐和山町および宮田町に所在する。この一帯には、鈴鹿山脈を源流とする矢倉川により、北西方向へと広がる扇状地が形成されている。この扇状地付近で伏流した水の一部は西へと向かい、やがて佐和山の山塊にあたって小野川と合流し、北の旧入江内湖方面へと注いでいる。また、小野川は小規模な河岸段丘を形成しており、扇状地上においては畑作、扇端部にあたる河岸段丘の下部付近では、その豊富な湧水を用いた水田が営まれている。

[歴史的環境]

佐和山城跡周辺においては、中世の山城である佐和山城と、それに伴う武家屋敷・城下町などの中世の遺跡群が存在する。周辺には当時の地割が今なお良好に遺存しており、江戸時代に描かれた『沢山古城之絵図』と比較すると、現在の地図と一致する部分も多い。

実際の調査では、平成21年度に滋賀県教育委員会が行った発掘調査によって、百々町を

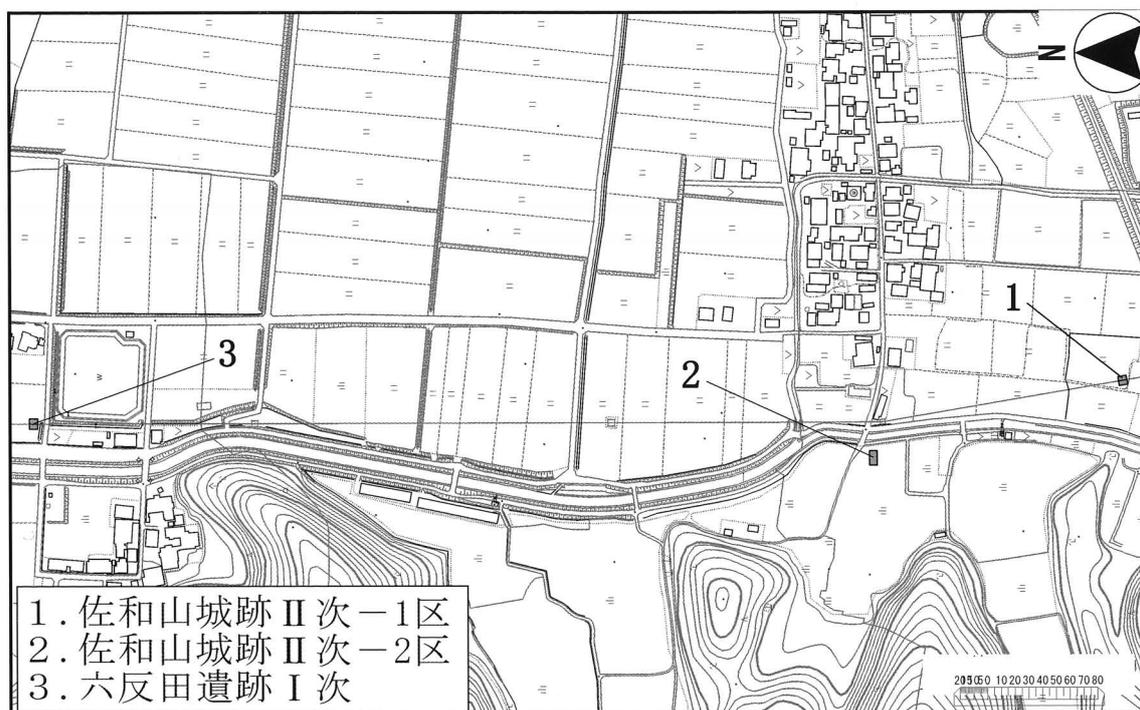


図1

通る道や溝などの遺構が、あぜ道などの現在の地割に重なる形で確認されている。

また、六反田遺跡では、平成 19～20 年度に滋賀県教育委員会が行った発掘調査によって、古代の遺構や縄文時代後期の貯蔵穴などが検出されており、当地周辺においては古くは縄文時代、古代、中世、そして現代に至るまで、長く人々の生活の場として利用されてきたことが知られている。

今回の調査では、調査対象となった鉄塔建設地点 3 箇所のうち、2 箇所は佐和山城跡、1 箇所は六反田遺跡と 2 遺跡に別れている。このため、以下では第 1 章を佐和山城跡Ⅱ次-1 区・2 区、第 2 章を六反田遺跡Ⅰ次として、2 章に分けて報告することとしたい。

第1章 佐和山城跡

遺構と遺物

(佐和山城跡Ⅱ次-1区)

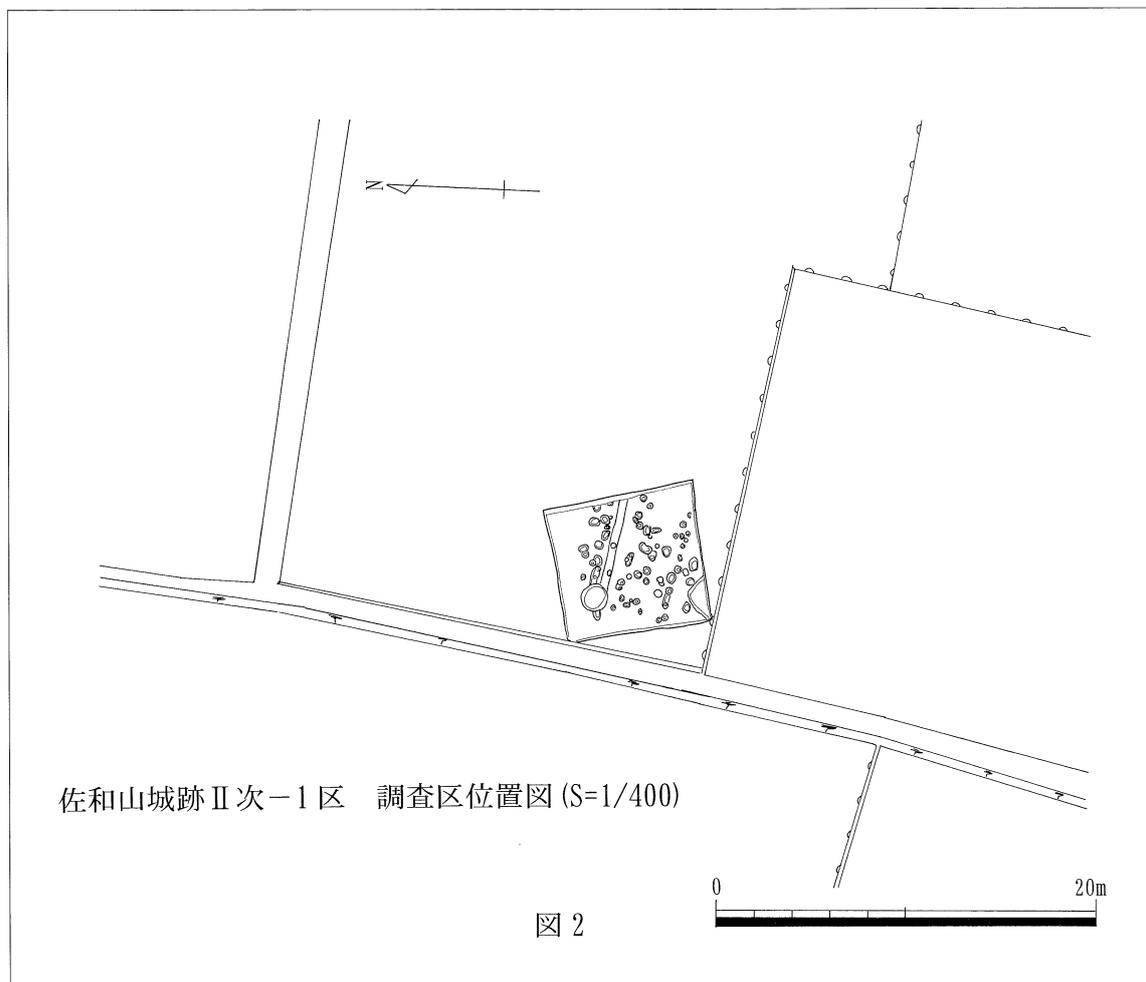
基本層序

佐和山城跡1区においては、表土層である耕作土および床土が約50cmあり、その下部において、地山Ⅰ・地山Ⅱの各堆積層を確認した。

地山Ⅰは細粒砂を少量含む白黄褐色粘質土層で、遺構面から-0～30cmの厚さで堆積していた。この層は調査区ほぼ全域の地山面を成しており、検出した遺構は、基本的に全てこの層の上面から切り込んでいた。

地山Ⅱは細粒砂および小角礫を多く含む赤褐色土で、調査区内北西側(河川側)の遺構面の一部及び地山Ⅰの下層において、遺構面-0～50cmの厚さで堆積している。

地山Ⅱについては、おまん川や小野川旧流路の作用による堆積層であると思われる。調査区内東側の同程度の深度では検出できなかったため、地点によって偏りをもって分布する層であると思われる。



検出遺構

発掘作業は、地表面から約 50cm 余の造成土を除去したのち、地山 I 上面において遺構検出を行った。その結果、掘立柱建物 3 棟、溝 1 条、土坑 2 基、ピット群などを検出した。

以下、各遺構について詳述する。

掘立柱建物

SB01 (図 4)

平面規模については、1 間×3 間(約 3.0m × 約 4.8m)を測る。長軸は周辺地割に直交し、隣接する SD01 と並行する。また、SB02 を構成する P1 および、SB01 に関わる可能性のある P2 については、柱穴内に柱根(図版 22 - P1・P2)が残存していた。また、先後関係は不明であるが、一部重複する形で SB02 が存在する。

SB02 (図 5)

SB01 に重複する形で存在する掘立柱建物である。南東隅に存在すると思われる柱穴が調査区外となっているため、全容は不明であるが、平面規模は概ね 1 間×3 間(2.8m × 4.0m)を測る。SB01 と同じく、長軸は周辺地割りに直交する。

SB03 (図 5)

建物の東半部が調査区外となっているため、全容は不明である。把握できている範囲では、平面規模は 1 間×2 間以上(2.6m × 1.0m 以上)となっている。長軸は周辺の地割と直交し、SB01・02 などと同様の方位を示す。

溝

SD01 (図 3)

SD01 は、周辺地割りに直交する軸に構築された溝である。調査区内においては長さ約 6.6m を測る。溝の周辺部における位置としては、溝から北部の農道までは約 18m、南側の境界までは、約 6m の距離を測る。

土坑

SK01 (図 6)

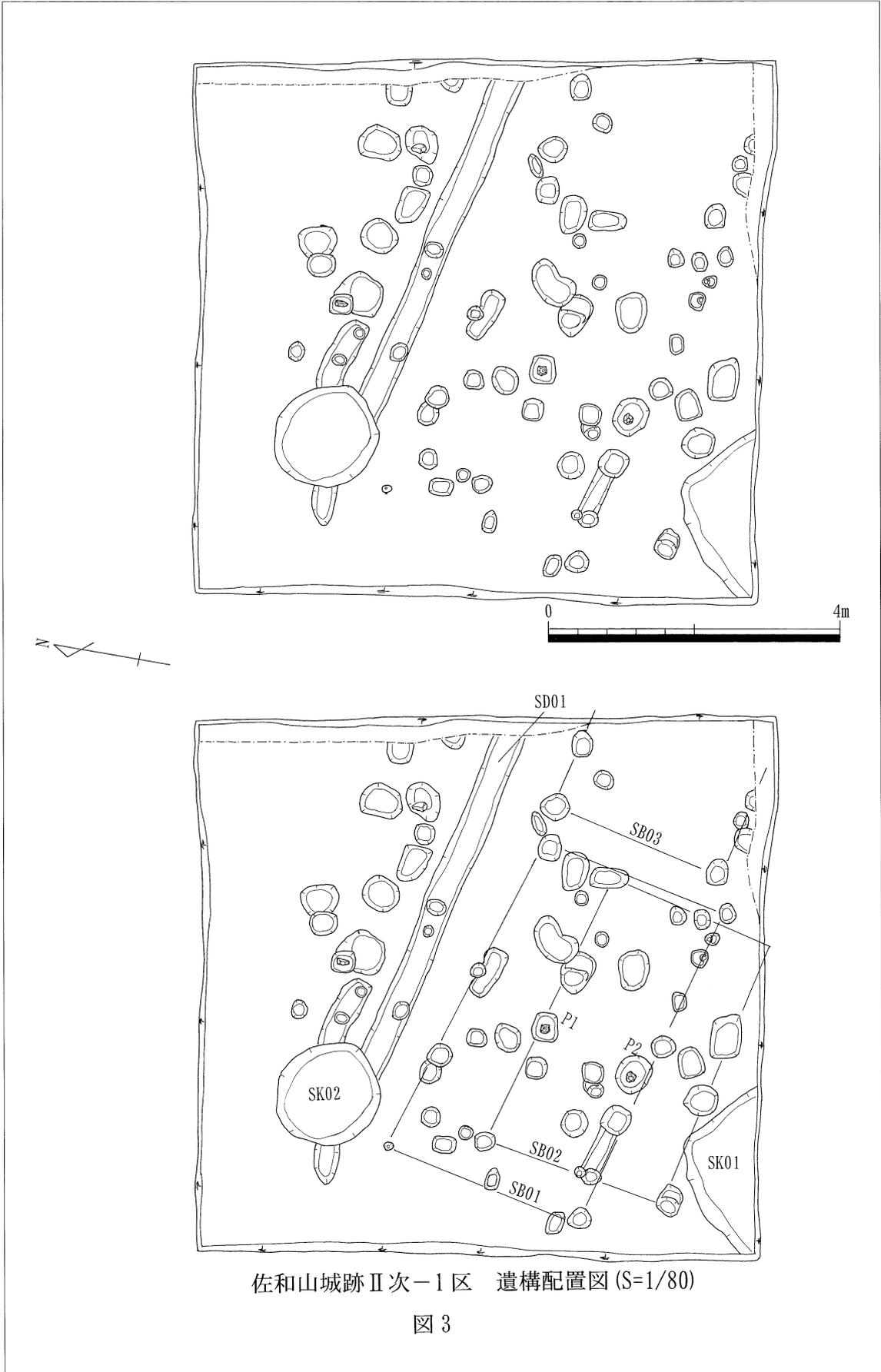
平面プランについては、調査区外へと延びているため全容は不明である。おそらく隅丸方形を呈するものと思われるが、確認できる範囲では 2.0m 以上×1.2m 以上程度となっている。深さは 20cm 程度を測る。

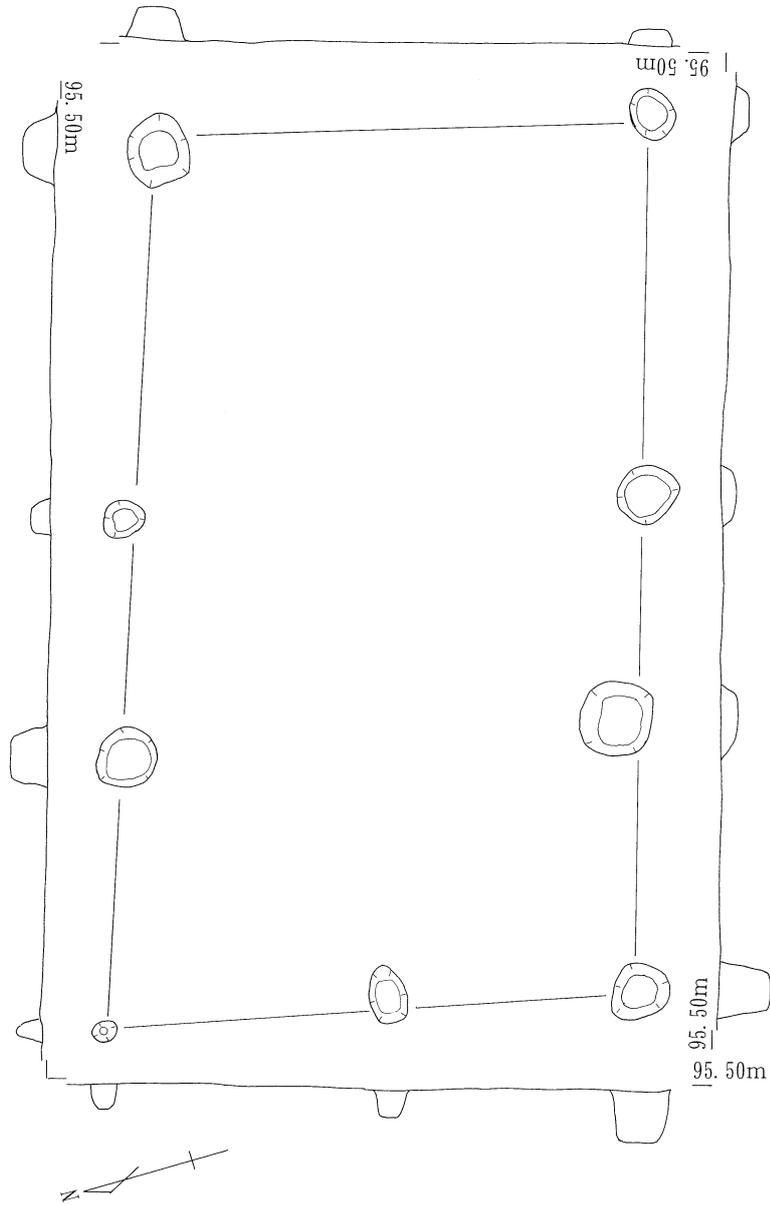
SK02 (図 6)

平面プラン円形を呈する土坑である。規模は東西約 1.4m × 南北約 1.3m を測り、深さは約 19cm を測る。SD01 を切る。

出土遺物

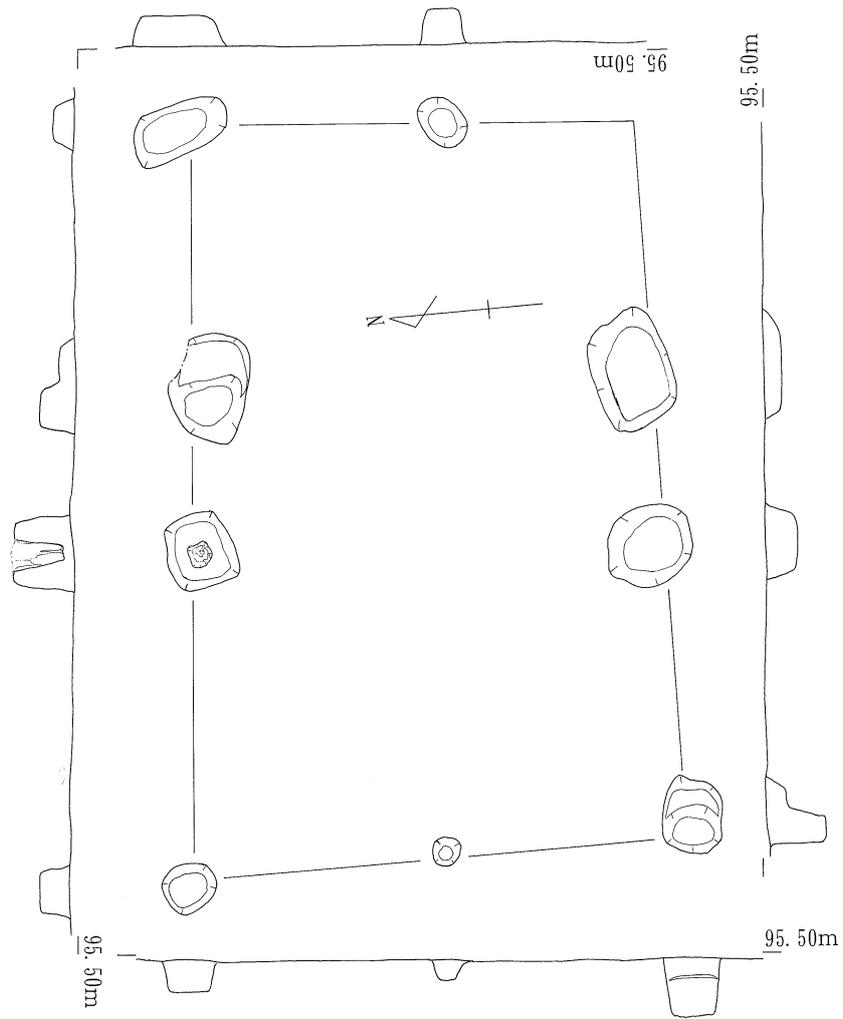
この地点においては、先述の柱根 2 本の他には遺物が出土していないため、遺構の時期については不明である。しかし、この地点における土地利用について、少なくとも江戸時代以降においては耕地化していることから、佐和山城城下町時代のものである可能性が高い。



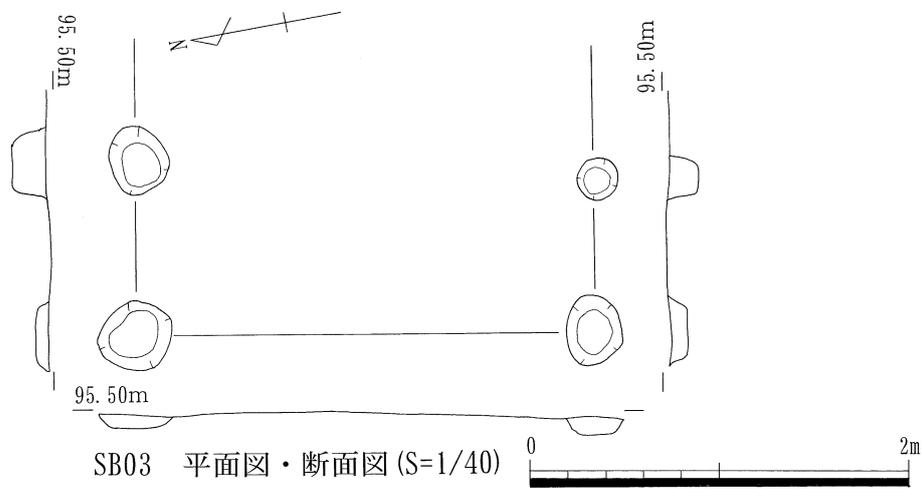


SB01 平面图·断面图(S=1/40)

图 4

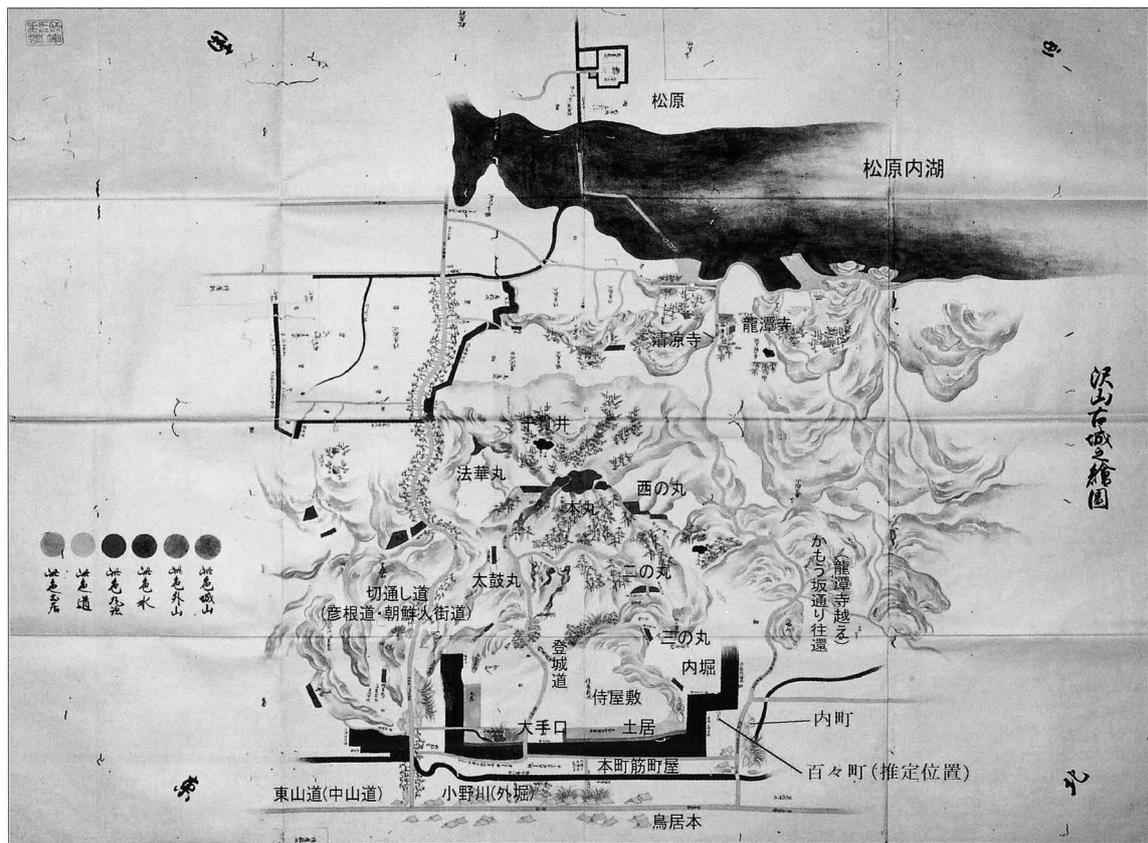
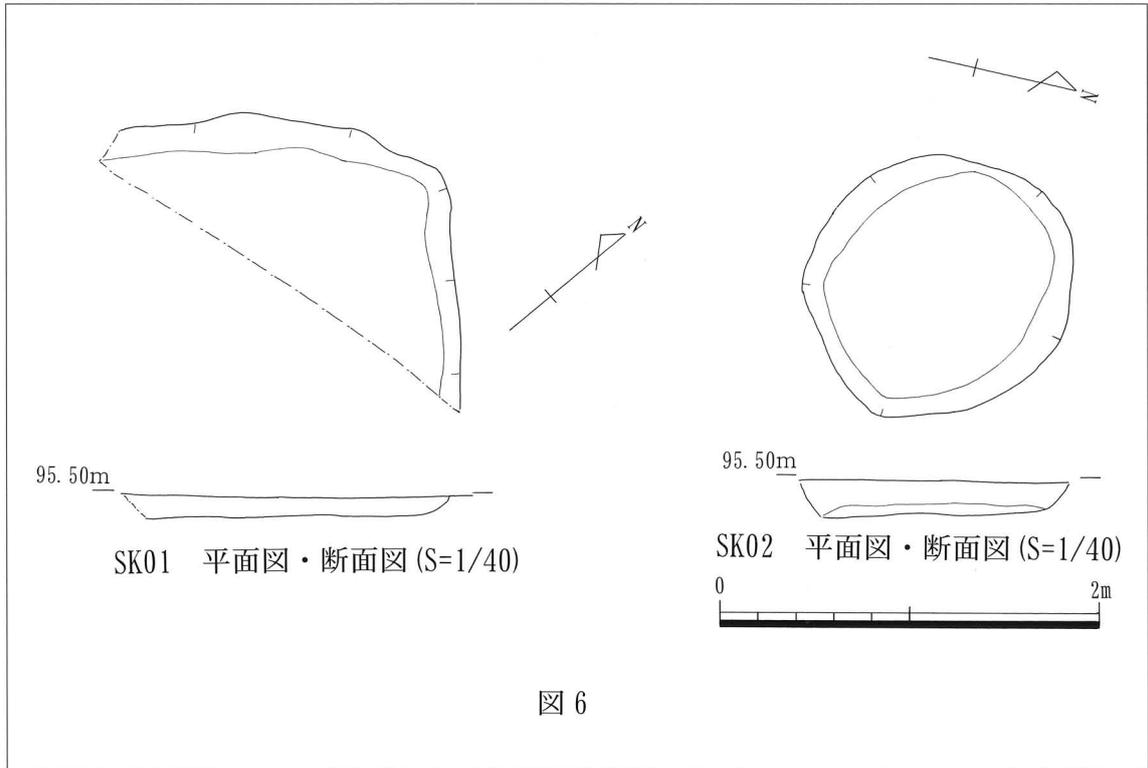


SB02 平面图·断面图 (S=1/40)



SB03 平面图·断面图 (S=1/40)

图 5



『沢山古城之絵図』(彦根城博物館所蔵)

(佐和山城跡Ⅱ次-2区)

基本層序

佐和山城跡2区においては、表土層が約60cmあり、その下部において、地山Ⅰ(河川堆積層)を確認した。

地山Ⅰは細粒砂および粘質土の互層からなる堆積層であり、河川的作用による堆積層であると考えられる。地山Ⅰには、多量の植物遺体が含まれており、時期は不明ながら、河川の氾濫等に際して押し流された樹木が、この地点において滞留、埋没したものと考えられる。

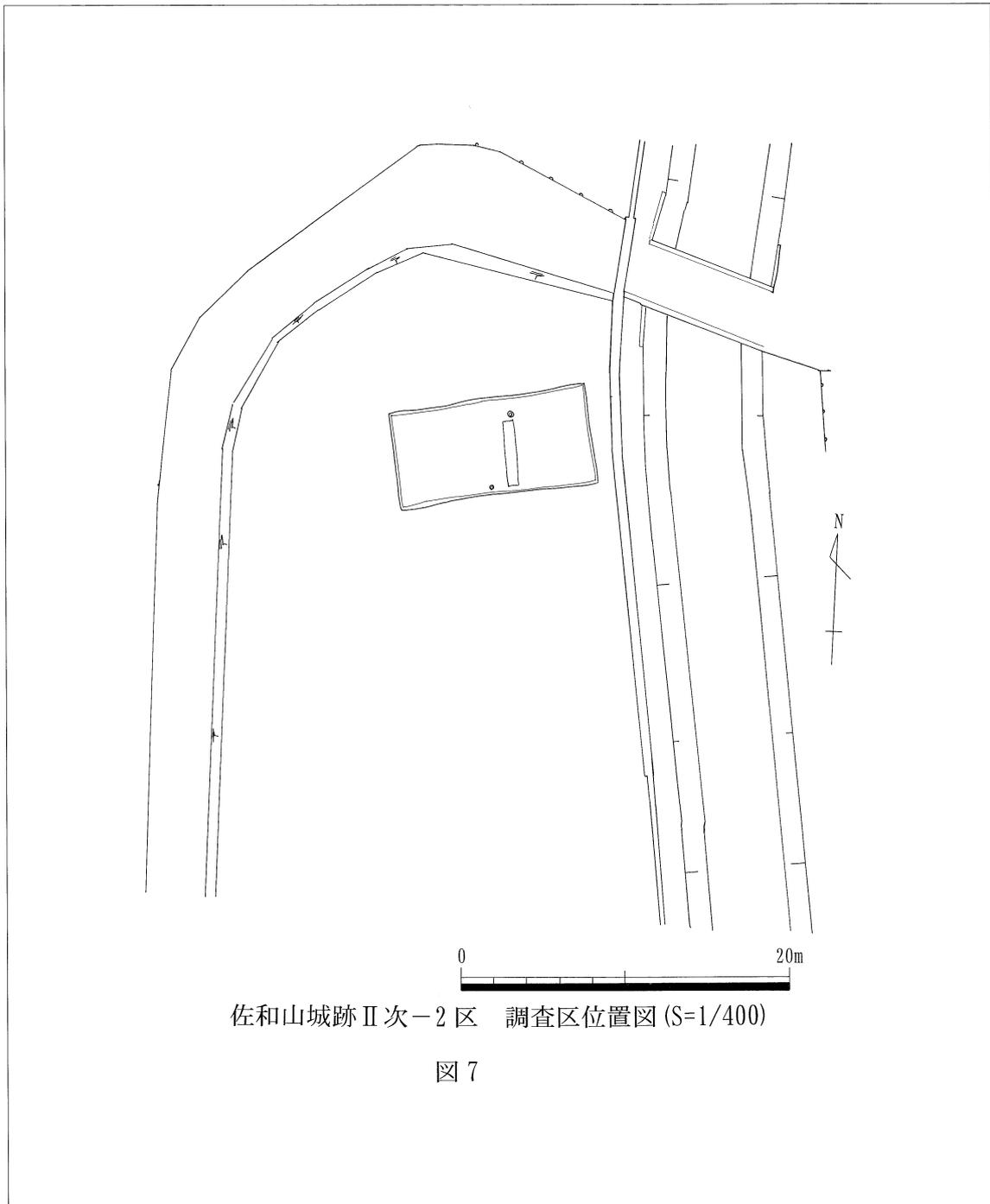
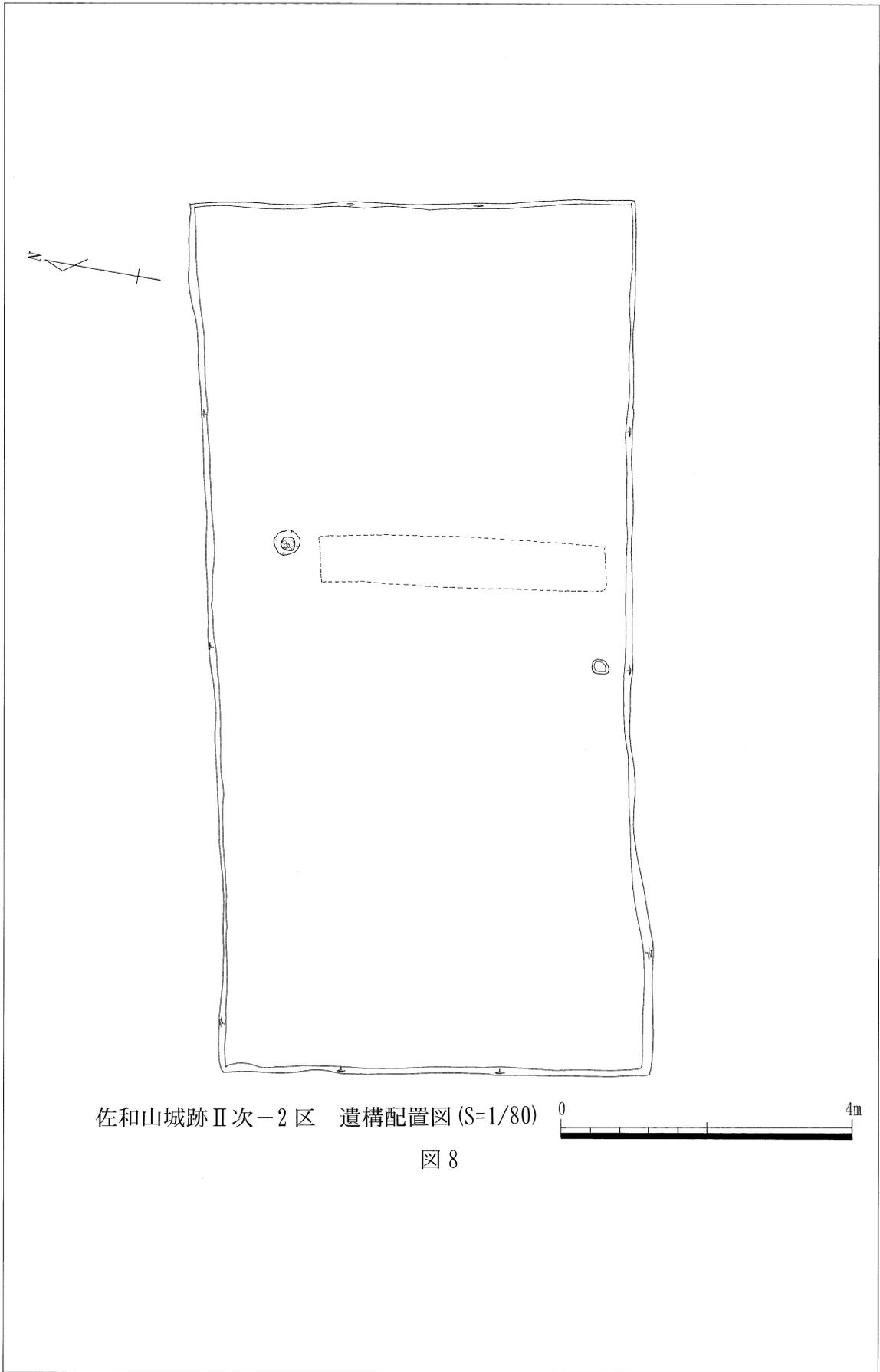


図7



検出遺構

発掘作業は、地表面から約 60cm 余の表土を除去したのち、地山 I 上面において遺構の検出を行った。その結果、柱穴 2 基を検出した。

このうち、P1 については直径約 20cm 程度を測り、深さは約 30cm を測る。また、P2 については直径約 30cm 程度を測り、内部からは柱根が出土している。

出土遺物

この地点における出土遺物については、試掘時に確認した土師器皿の小破片以外には、表採遺物を含め、ほとんど出土していない。

このため、この地点で検出した遺構の時期および性格については把握しえない。しかし今回、この地点において人為による活動痕跡を認めることができおり、今後のこの地点周辺における知見増加が期待される。

調査の成果

今回の調査では、佐和山城跡 1 区において、区画溝と思われる溝 1 条と掘立柱建物 3 棟を検出した。また、2 区においては性格は不明ながら、2 基の遺構を確認することができた。

ここでは、明確にその性格を特定することができる佐和山城跡 1 区について、考察を行うこととしたい。

今回の調査地点は、江戸時代に成立した『沢山古城之絵図』において描かれた、「内町」の西側、現在の「字 百々町」に相当する地点に位置している。この絵図に描かれた地割のラインについては、現在でもその多くが踏襲されていると考えられており、道についても畦畔道として、今もその名残を留めている。そして今回の調査区は、この畦畔道のすぐ東側に位置していたことから、道路やこれに面した町屋などの遺構の存在が期待された。

結果として、道路遺構そのものは検出できなかったが、道路の想定ラインに直交する主軸を持つ、奥に細長いプランの掘立柱建物 (SB01・02・03) を確認した。また、同様の方位で掘られた溝 (SD01) については、掘立柱建物の敷地を区画する溝と思われ、調査地南側に残る地境と併せて考えると、間口約 6m × 奥行き約 7.5m 以上の細長い区画の存在が推定できる。

また、調査区南側の地境から調査区北部の農道までを 1 つの大きな区画として捉えた場合、その間口は約 24m あることから、間口約 6m の区画が、4 区画存在することが推定できる。このことから、この地点に間口が狭く奥行きが長い、いわゆる短冊状の地割が並ぶ、城下町的な景観を復元することができるものと思われる。

ただし、今回の調査面積は極めて狭小であるため、こうした推定を裏付ける証拠を得ることはできなかった。このことについては、今後当地周辺における調査事例の増加に期待することとしたい。

第2章 六反田遺跡

遺構と遺物

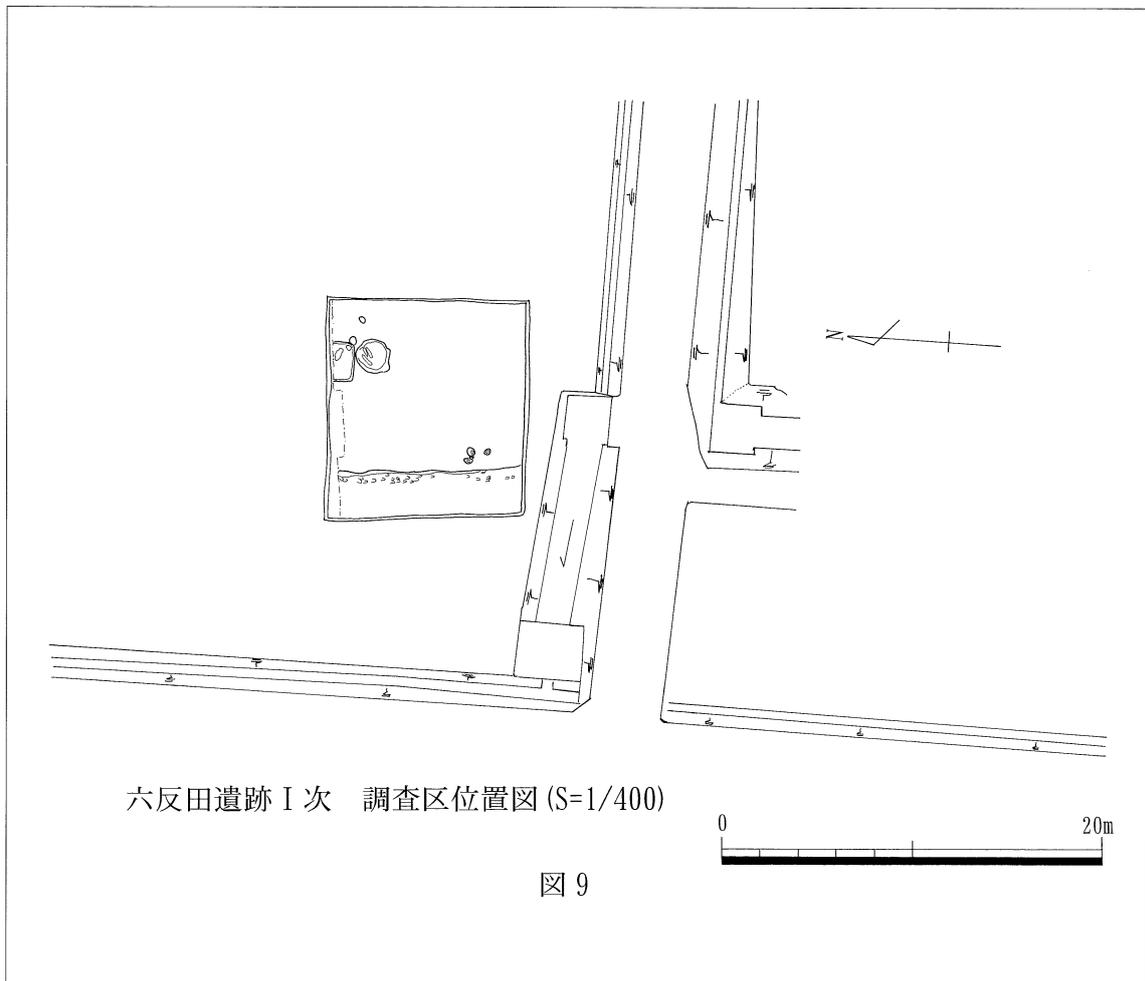
基本層序

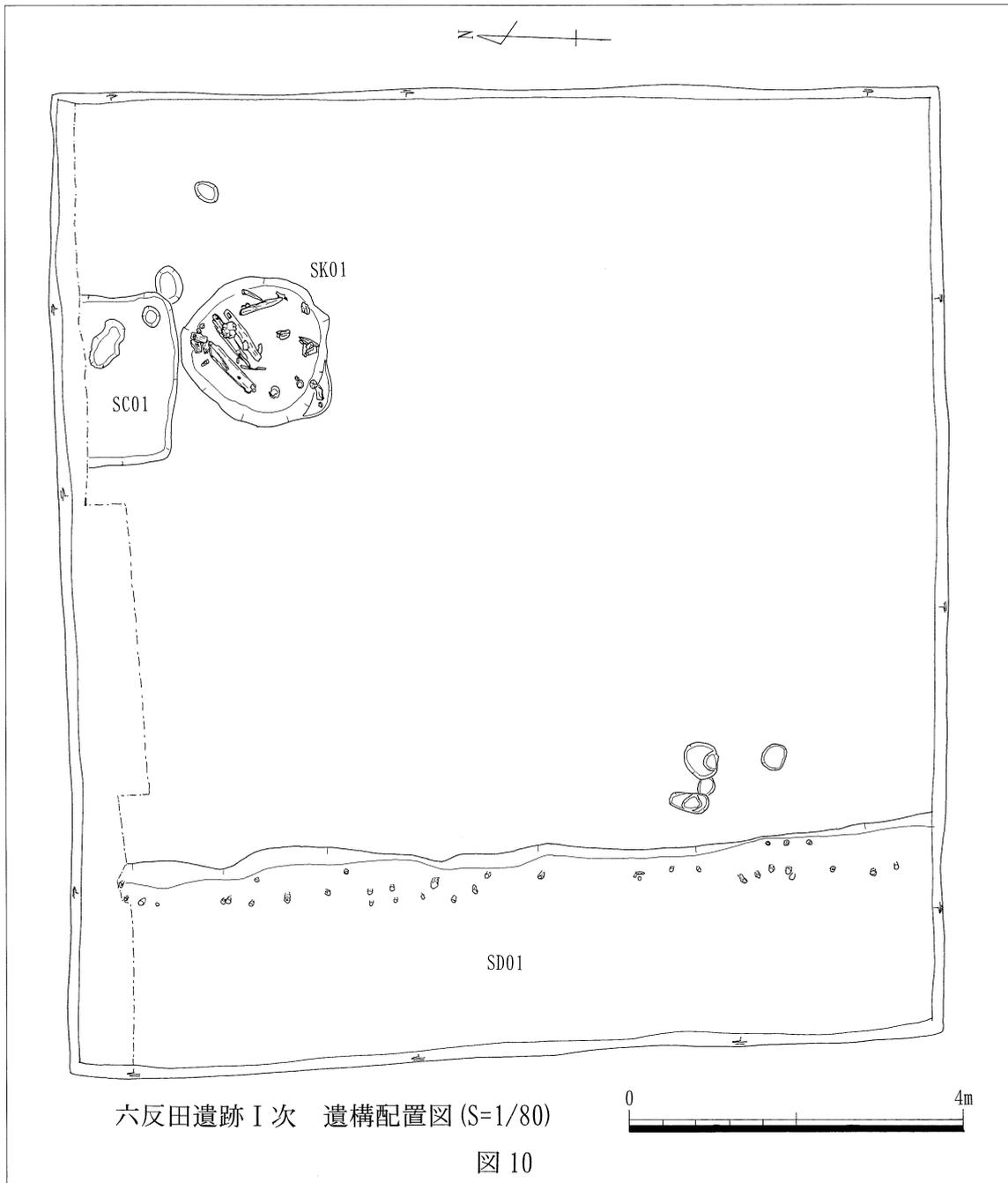
調査地点においては、表土層である耕作土および床土が約40cmあり、その下部において、地山Ⅰ及び地山Ⅱを確認した。

地山Ⅰは白灰色粘質土層で、遺構面から-0～30cmの厚さで堆積している。また、調査区の東側においては地山Ⅱが遺構面に一部露出しており、その堆積は小野川がある西側へ向かって緩やかに下降し、地山Ⅰの下層へと潜り込む。この地山Ⅱは細粒砂および小角礫を多く含む赤褐色土であり、遺構面-0～50cmの厚さで堆積する。また、この層は河川等による堆積層であると考えられ、縄文時代後期の遺物を多く包含していた。

検出遺構

発掘作業は、地表面から約40cm余の耕作土を除去したのち、地山Ⅰおよび地山Ⅱの上面において遺構の検出を行った。その結果、溝1条、土坑1基、竪穴建物1棟、ピットなどを検出した。以下、各遺構について詳述する。





溝

SD01 (図 11)

SD01 は、ほぼ正南北の軸で掘られた溝である。調査区内においては長さ約 11m、幅約 2m、深さ約 40cm を測り、調査区西端を南北に貫いている。その東岸には杭列が護岸のために打ち込まれており、調査区内では 36 本を確認した。

この溝については、小野川に並走していることから、かつての小野川の東岸、あるいは小野川から引き込まれた用水路であった可能性が考えられる。溝の底は平坦に掘り込まれており、岸辺の杭列と併せて、大規模に整備が行われていた様子が伺われる。

出土遺物については、須恵器などが数点出土しているが、近世の染付の破片が数点出土しているため、構築時期は江戸時代後期頃であると思われる。

竪穴住居

SC01 (図 11)

平面規模については、北半部が調査区外となっているため全容は不明であるが、調査区内では東西約 2.0m × 南北 1.0m 以上となっている。調査区北端の断面において、中心部に炭化物を伴う、炉跡と考えられるピットが確認されていることから、平面形状はこの炉跡を中心とした、隅丸正方形を呈するものと思われる。出土遺物は土師器小破片のみであり、構築時期は不明である。

土坑

SK01 (図 11)

平面プラン円形を呈する土坑である。規模は東西約 1.8m × 南北約 1.8m を測り、深さは約 30cm を測る。

内部からは須恵器・土師器などとともに多量の炭化木材が出土している。この木材についてはホゾ穴などの加工痕が見られることから、何らかの建築物の部材であった可能性が高い。また、土坑内部には被熱した痕跡が見られないことから、他の地点において燃やした、もしくは燃えた材を、この地点において穴を掘り、一括廃棄したものと推定される。

出土遺物

この地点においては、各遺構から出土した遺物の他、遺構面の下層に位置する縄文時代後期の遺物包含層から、多量の縄文土器が出土している。

以下、各遺構について遺物の詳細を記述するとともに、包含層出土遺物についても併せて記載する。

SK01 (1～21)

SK01 からは、須恵器・土師器・木器等の他、炭化した木材が多数出土した。

須恵器 (図 12-1～10) については、杯身、短頸壺、壺、甕等の器種が見られる。これらは、概ね 7 世紀中頃～後半頃の所産と考えられるが、一部、5 世紀に遡る杯身 (図 12-1) などが混入していた。

出土状況としては、7 世紀代の遺物が下層から出土しているため、遺構の形成年代は、これらの遺物と同時期であると考えられる。また、新旧の遺物は同一の埋土中から出土していることから、炭化材や器物の破片を廃棄する際に、何らかの理由で古い時代の遺物が混入したものと考えられる。

土師器 (図 13-11～17) については、小型の壺・甕類の他、杯身等が出土している。これらについては、その形態から 6 世紀末から 7 世紀後半頃の年代が想定されるが、須恵器との共伴関係から、概ね 7 世紀中頃～後半頃の所産と考えられる。

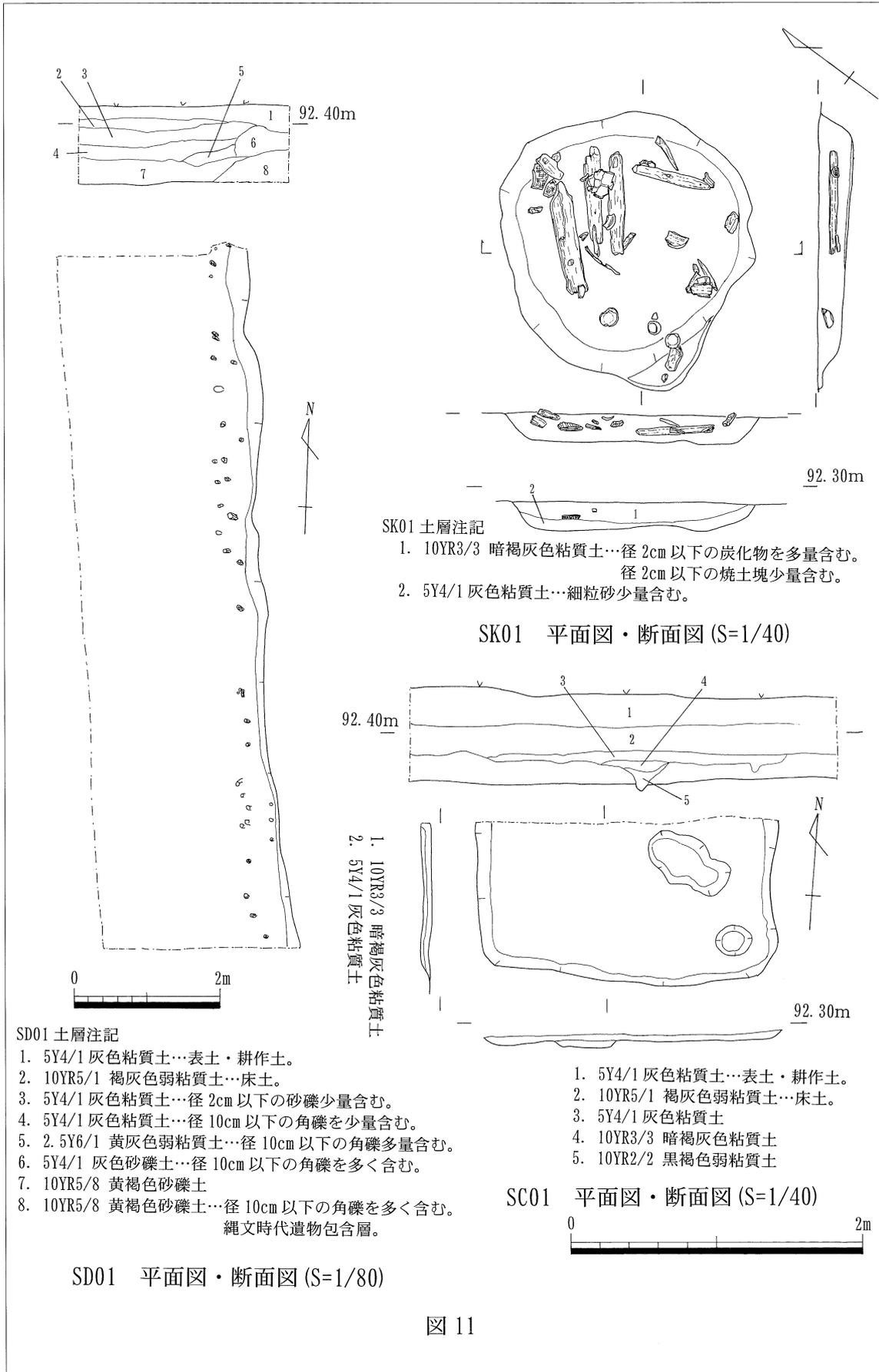


図 11

木製品(図14-18~21)については、いずれも板状に加工されたものである。このうち(図12-18、20)は鋭利な切断面を持つ木片、(図12-19)は平面円形であったと考えられる板状製品、(図12-21)は四辺を面取りされた、棒状の製品である。

また、この他に炭化等により劣化が著しく、取り上げることのできなかったものとして、ホゾ穴が空けられた建築部材様の木材が数点出土している。

SD01 (22、23)

SD01からは、中近世の陶磁器等が出土している。このうち(図12-22)は天目茶碗の底部、(図12-23)は肥前産と考えられる染付の小碗である。遺構の年代については、後者の年代から、概ね18世紀後半頃と考えられる。

遺物包含層 (24~67)

遺物包含層からは、縄文時代後期頃の土器片や、石器類が出土している。

このうち、出土した土器片については深鉢・鉢・注口土器等の器種が見られる。これらについては小破片が大半を占めていることから、個々の全体形状は不明であるが、その文様や口縁部の形状などから、概ね縄文時代後期前葉~中葉、北白川上層式2期~3期の時期に限定されるものと判断される。

文様には、口縁及びその直下において、1条~数条の沈線を口縁に並行に施文し、その沈線の周辺や沈線の間には縄文や刺突文を充填するものが多く見られる。器面の仕上げには、精製のものにはミガキ、粗製のものではナデ・条痕等が認められた。

また、器形については口縁部がやや内湾するものが多く見られる。この傾向は、有文・無文により若干の差異が認められ、無文の個体については口縁が直立もしくはやや外反するように開くものが多く見られる。こうした差異は、器種の違いにより生じている可能性もあるが、いずれも小破片であるため詳細は不明である。

各遺物については、北白川上層式2期の遺物として、29が深鉢、34・40・47が鉢。北白川上層式3期の遺物としては、27が深鉢、38が鉢となっている。この他の遺物については時期が明確ではないが、いずれも概ね北白川上層式2期~3期の内に含まれるものと考えられ、その多くは3期以降に属するものと考えられる。

石器については、磨製石器として磨石(図18-59、60)・砥石(図18-61)、二次調整を持つ剥片(図18-62)・楔型石器(図18-63)、サヌカイト原石(図18-64)等が出土している。これらの内、(図18-63)については、その認定が難しいところではあるが、対抗する2側面に階段状の剥離と潰れを持っていることから、楔型石器とした。また、(図18-64)については、1面に打撃による打ち欠きが見られるほかには、ほぼ全面に原礫面を残している。また、図化したもの以外にも、多くのサヌカイト剥片が出土しており、上記の遺物も含め、総点数19点、総重量は415gを測る。

調査の成果

今回の調査においては、近世の溝、古代の廃棄土坑および古代と推定される竪穴住居、縄文時代後期の遺物包含層等を検出した。

このうち近世の溝については、かつての小野川の東岸、あるいは灌漑のための用水路である可能性が考えられ、江戸時代における小野川の利用について、貴重な情報を得ることができた。

土坑については、その内部から建築部材であったと考えられる炭化した木材が、7世紀中頃から後半頃にかけての遺物と共に出土しており、近隣にこれらの部材を使用した建物が存在していたことが想定される。

竪穴住居については、遺構の半ばが調査区外となっており、全体的な平面形状は不明である。しかし、調査区壁面際に住居中心部の炉跡と思われる、炭化物を多く含む小穴を検出していることから、この小穴を中心とした、隅丸正方形の平面プランが想定される。遺物については土師器の小片しか出土していないため、明確な時期は不明である。

次に、遺構検出面の下層から検出した縄文時代の遺物包含層については、小野川の氾濫等により形成された堆積層であると考えられる。この堆積層は、径約5cm前後の角礫および粗粒砂などからなる層で、現在の小野川へと向かって下降するように堆積している。この層からは、縄文土器及び石器類が出土しており、その時期は縄文時代後期中葉、北白川上層式2期～3期にほぼ限定されている。また、これらの土器については、表面にあまり摩滅が見られないため、その供給元は近隣にあったと考えられる。

調査区周辺では、平成20年度に滋賀県教育委員会が実施した調査によって、縄文時代後期の貯蔵穴15基が検出されている。このことから、今回の遺物の供給元は、この貯蔵穴を営んだ縄文時代後期の集落にあるものと考えられる。

六反田遺跡は、かつて入江内湖に近接し、旧矢倉川・小野川といった河川にも近接していた。また、西に佐和山の山塊が位置していることによって、冬場の強い西風を避けられる環境にある。こうした、資源的には山と川・湖などからの資源獲得が容易であり、かつ強風を避けることのできる立地は、安定した生活を営む上で、有利な条件であったものと考えられる。

今回の調査では、六反田遺跡の中でも小野川に近接する部分において、古代の遺構群および縄文時代後期の包含層などを確認した。しかし、今回の調査区は狭小であったことから、周辺における遺跡の展開など、まだ不明な部分も多い。今後の周辺における新たな知見の増加が期待される。

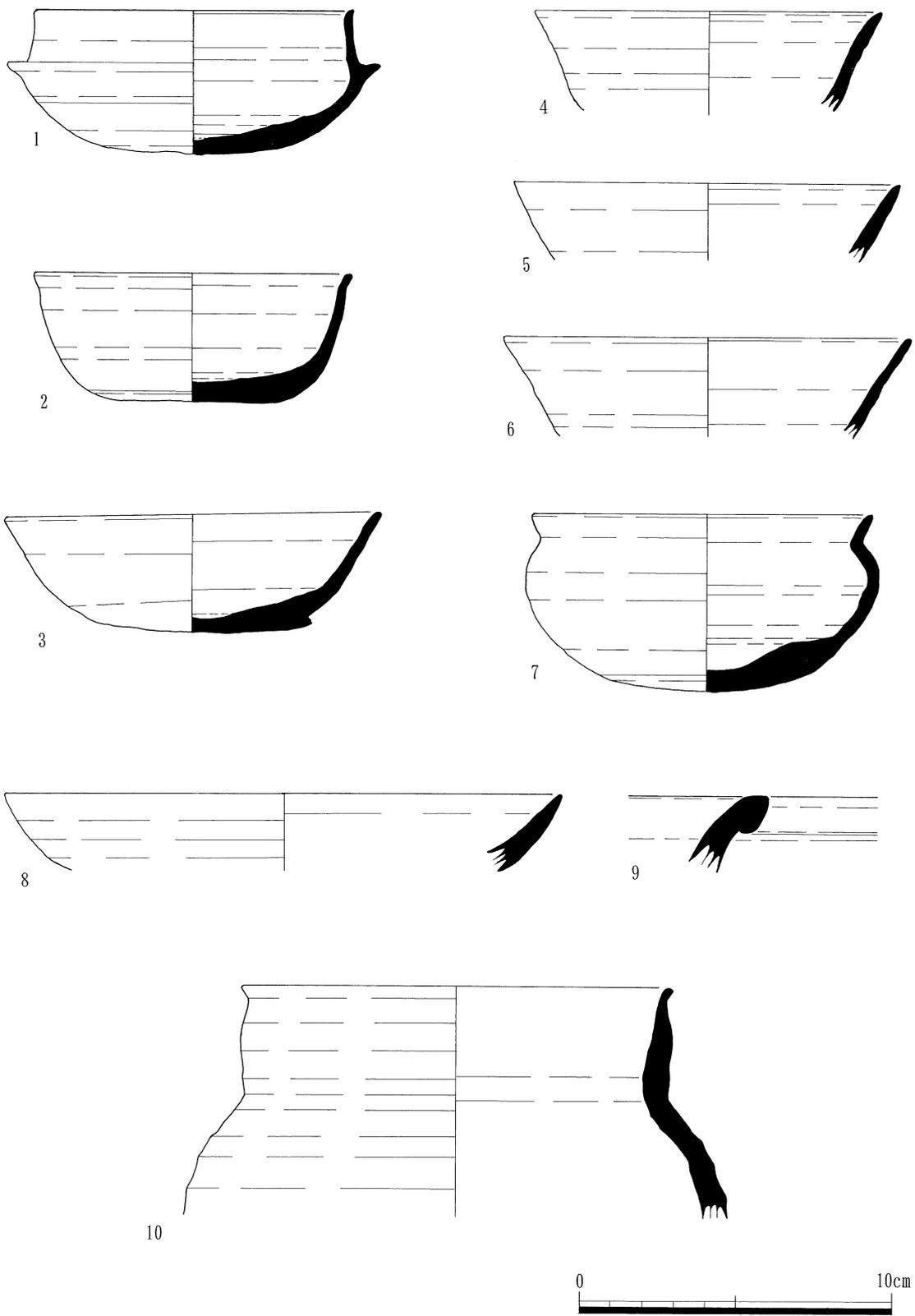
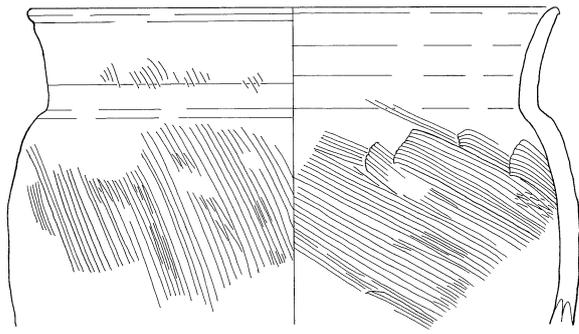
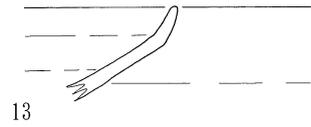


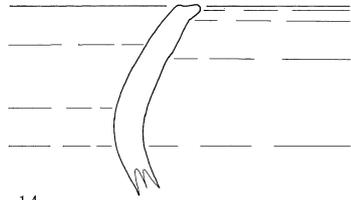
图 12



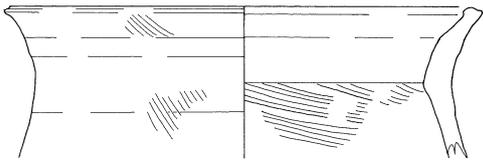
11



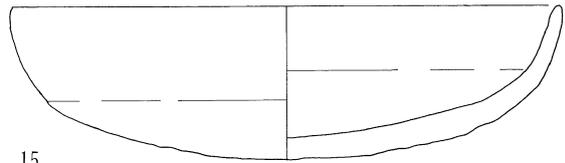
13



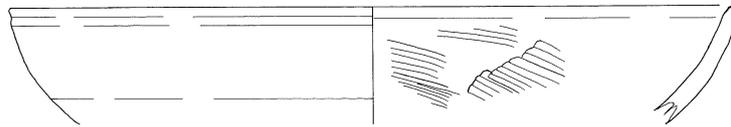
14



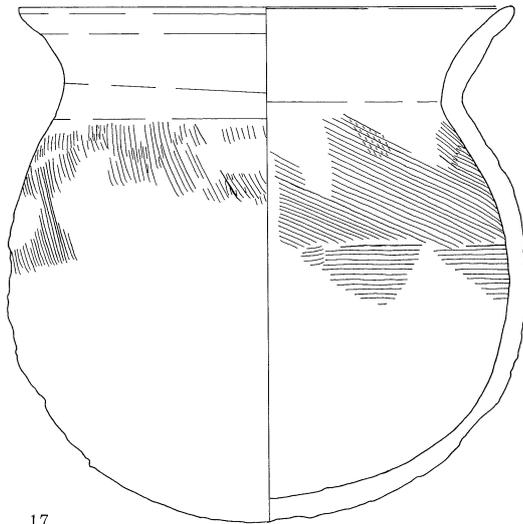
12



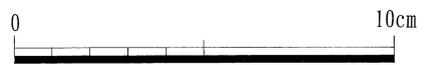
15



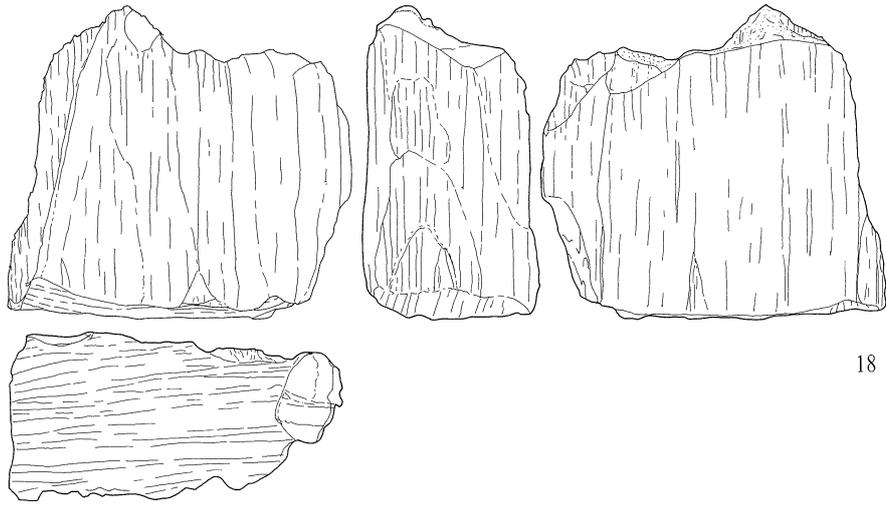
16



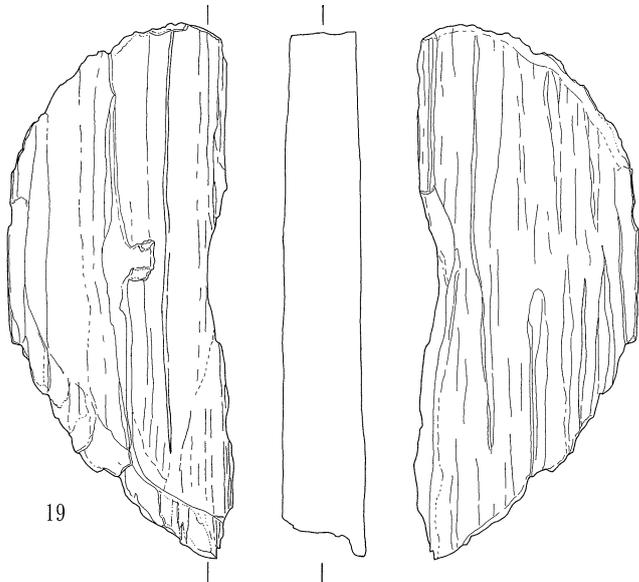
17



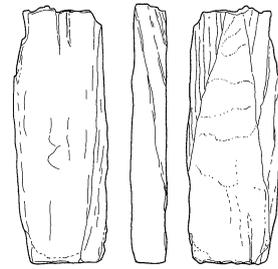
☒ 13



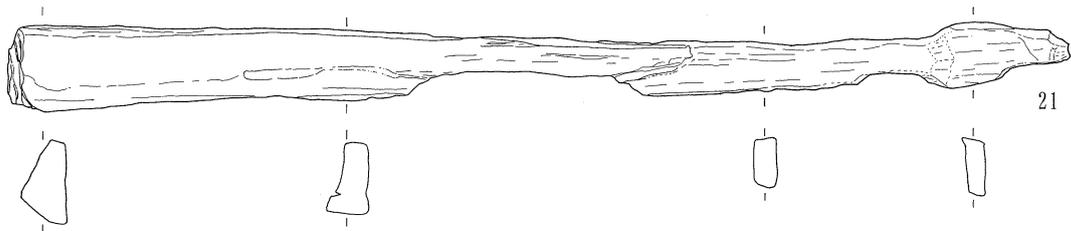
18



19



20



21



图 14

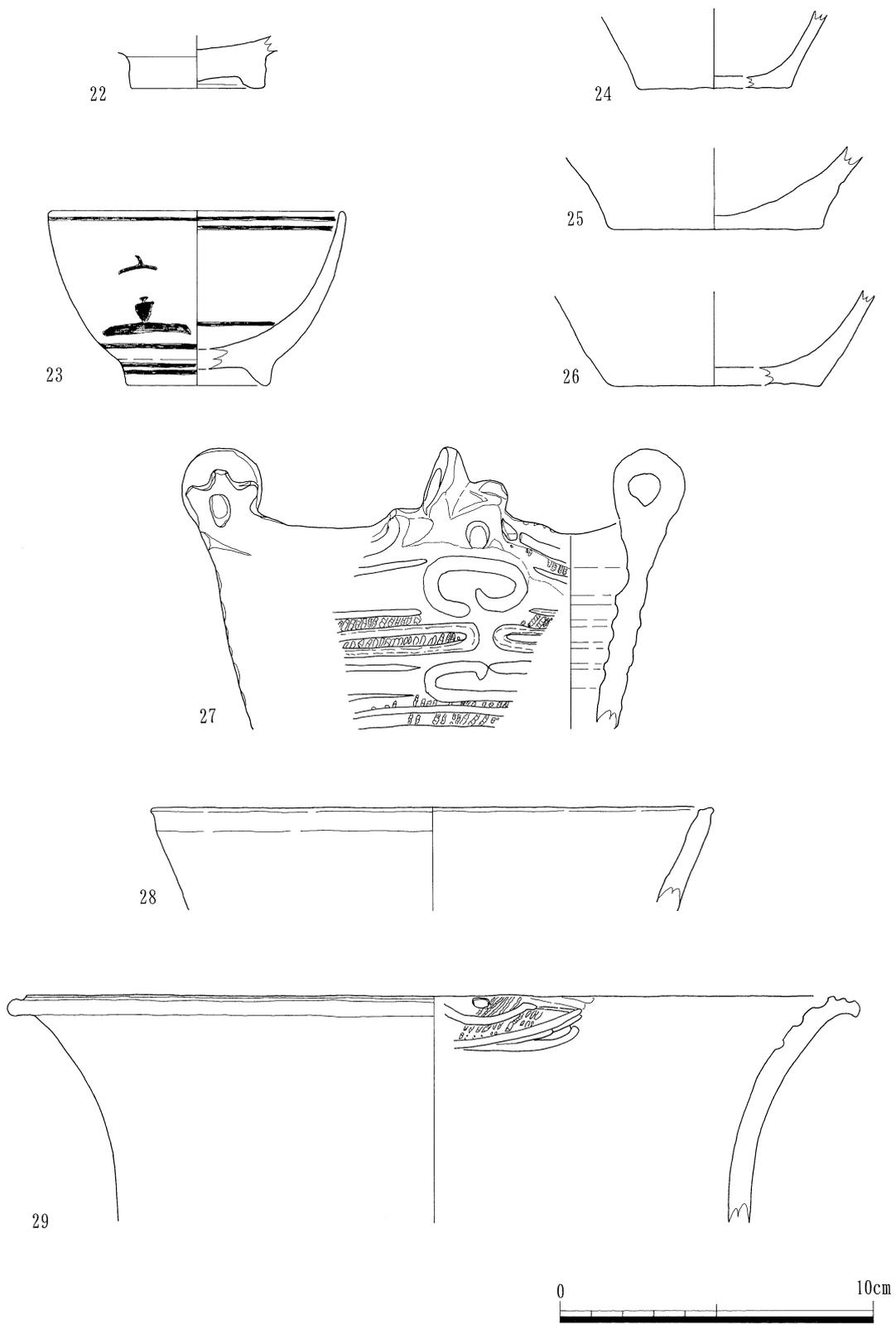


图 15

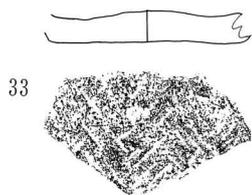
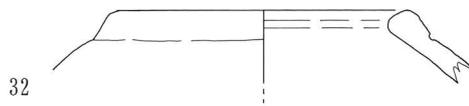
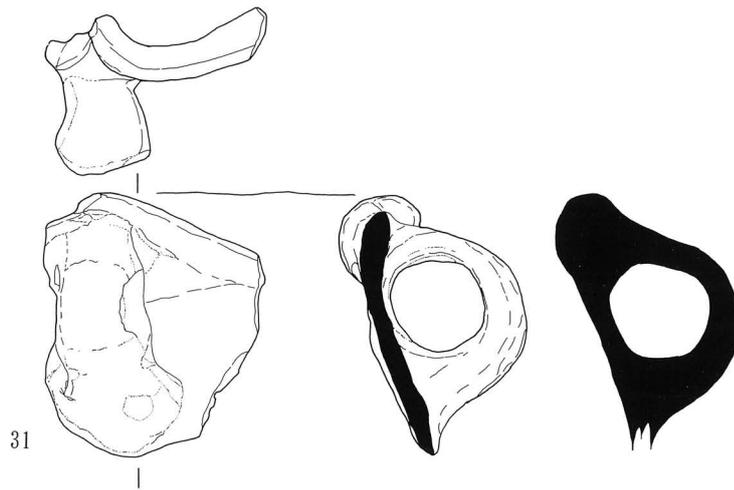
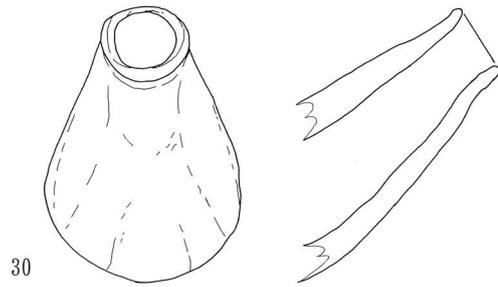


图 16

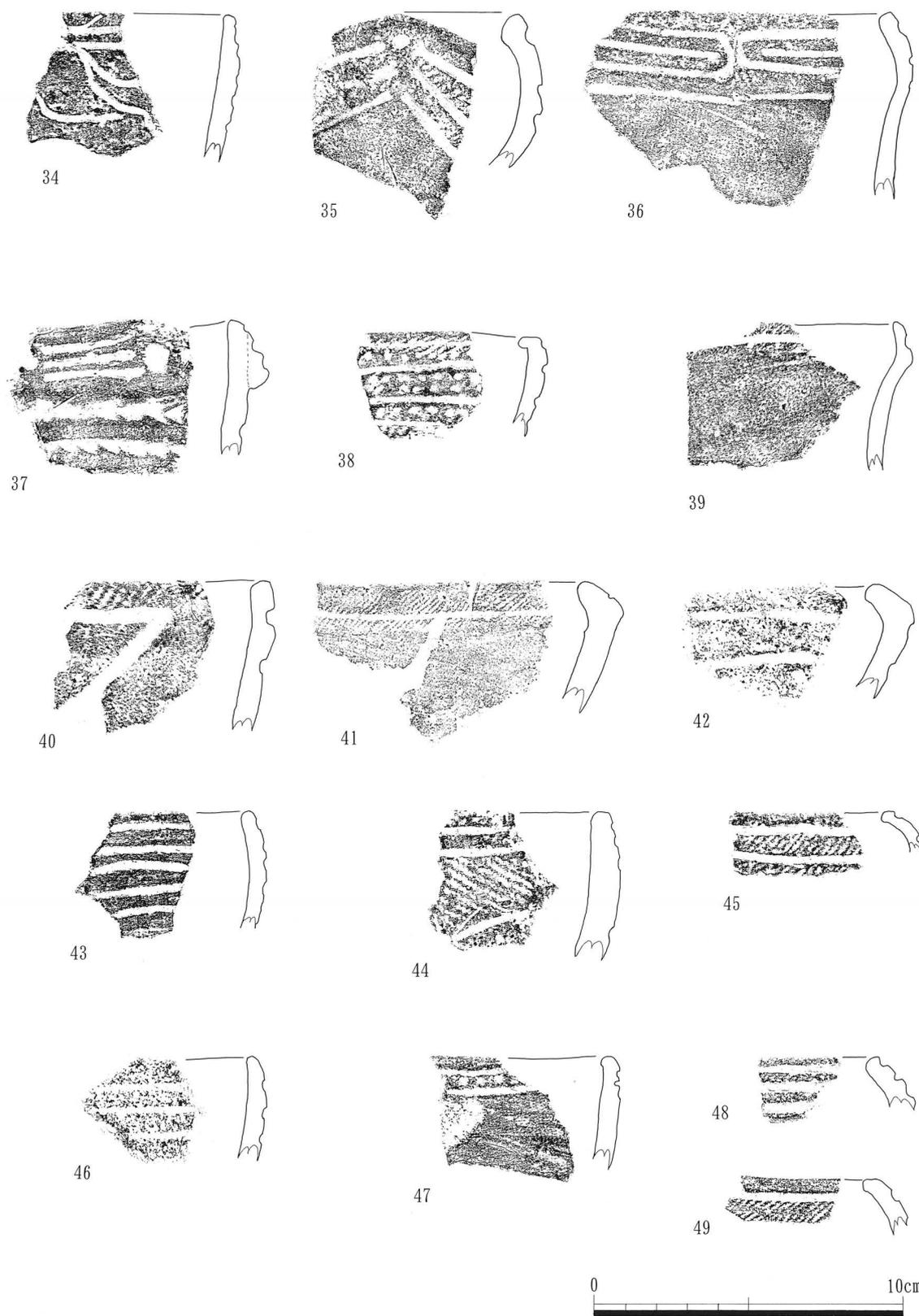


图 17

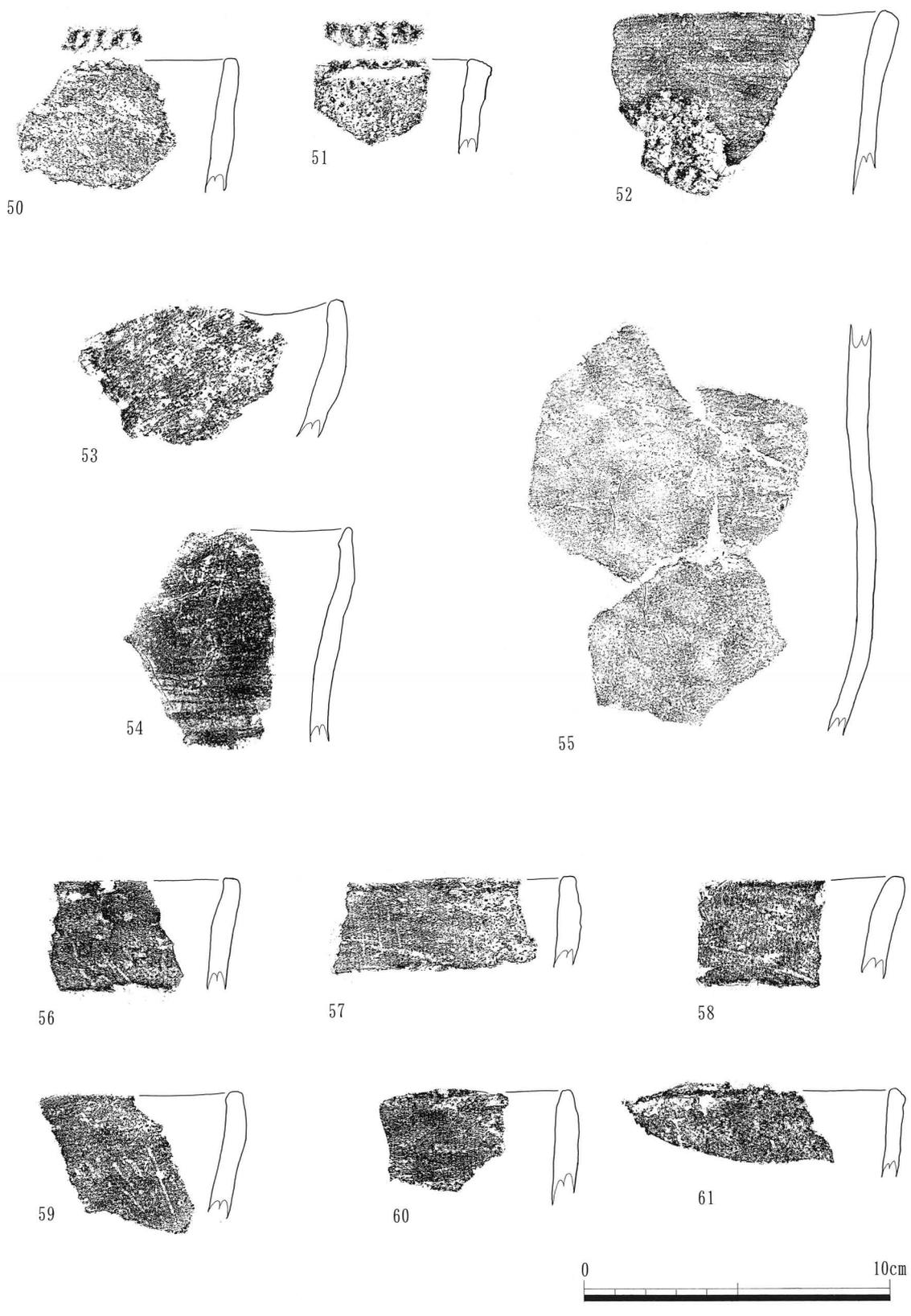


图 18

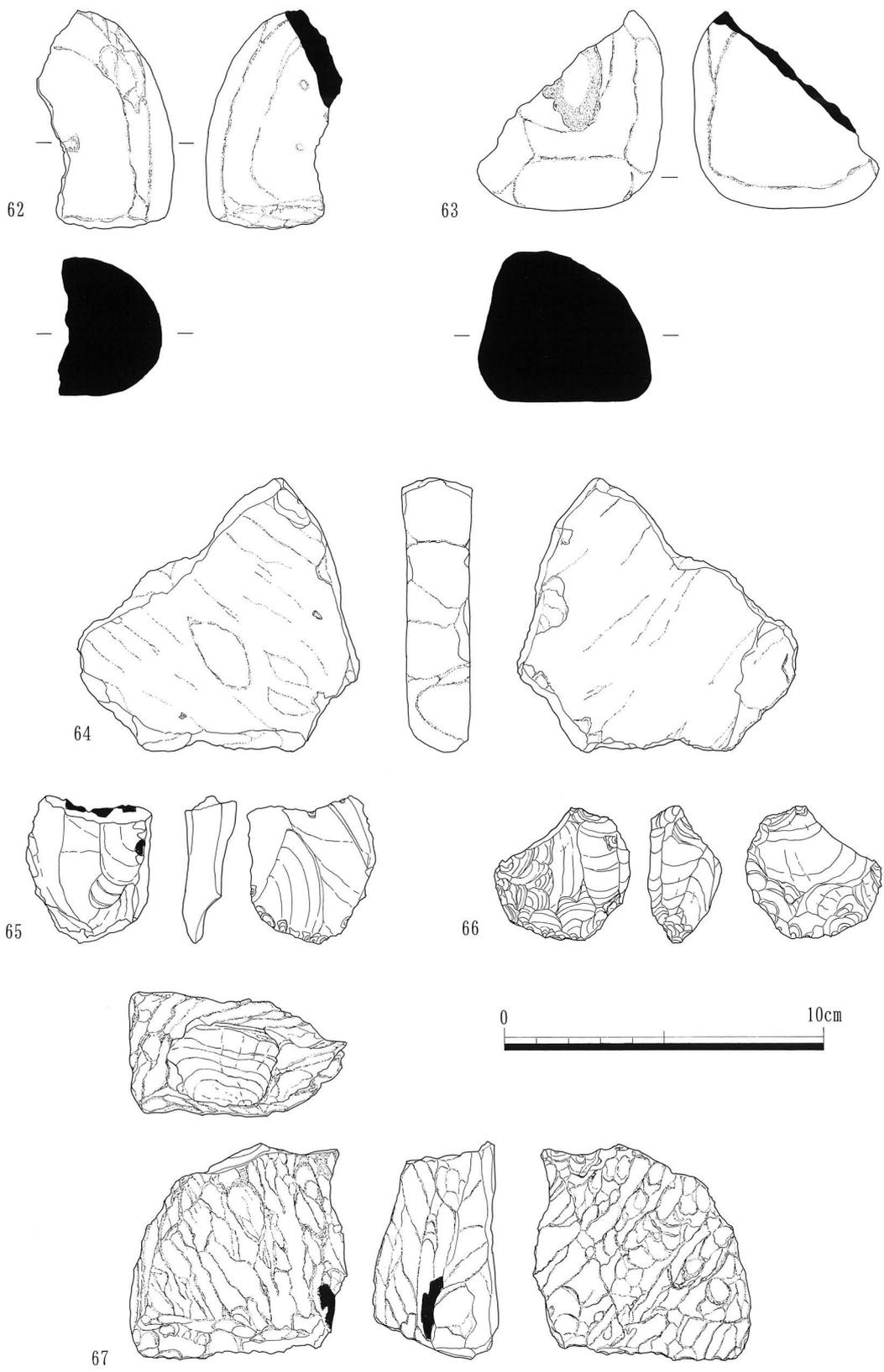


图 19

表1 出土遺物観察表

佐和山城跡Ⅱ次-1区

番号	遺構・層位	種別	細別	反転 図化	器径 幅 (cm)	器高 長さ (cm)	口径 厚さ (cm)	色調	その他
1	P1	木器	柱根		17.8	60.0	18.5		図版 22 参照。底面に切削痕。
2	P2	木器	柱根		12.3	39.0	13.5		図版 22 参照。底面に切削痕。

六反田遺跡Ⅰ次

番号	遺構・層位	種別	細別	反転 図化	器径 幅 (cm)	器高 長さ (cm)	口径 厚さ (cm)	色調	その他
1	SK01	須恵器	坏身	反	12.0	4.6	10.0	(内外面) 青灰色	
2	SK01	須恵器	坏身	反		4.2	10.2	(内外面) 灰色	底径 5.4
3	SK01	須恵器	坏身	反		3.9	11.9	(内外面) 灰色	底径 7.6
4	SK01	須恵器	坏身	反			11.0	(内外面) 灰白色	
5	SK01	須恵器	坏身	反			12.4	(外面) オリーブ灰色 (内面) 灰白色	
6	SK01	須恵器	坏身	反			13.1	(内外面) 浅黄橙色	
7	SK01	須恵器	短頸壺	反	11.4	5.8	10.9	(内外面) 灰色	
8	SK01	須恵器	壺	反			17.8	(内外面) 灰色	
9	SK01	須恵器	甕	反				(内外面) 灰白色	
10	SK01	須恵器	甕	反			13.7	(内外面) 灰色	
11	SK01	土師器	甕	反			13.8	(外面) 灰白色 (内面) オリーブ黒色	
12	SK01	土師器	甕	反			12.4	(外面) 暗灰黄色 (内面) 灰黄色	
13	SK01	土師器	甕					(外面) 浅黄橙色 (内面) 灰白色	
14	SK01	土師器	甕					(内外面) 浅黄橙色	
15	SK01	土師器	坏	反		4.1	14.3	(外面上部) 赤褐色 (内面底部) 暗灰色	
16	SK01	土師器	坏	反			19.0	(内外面) 浅黄橙色	
17	SK01	土師器	甕		13.8	13.7	13.0	(外面) 灰白色 (内面) 赤橙色	
18	SK01	木器	加工材		9.0	8.3	4.2		
19	SK01	木器	円板形木製品			14.3	2.0		
20	SK01	木器	加工材		2.5	6.8	1.0		
21	SK01	木器	加工材		2.3	28.1	1.1		
22	SD01	陶器	天目茶碗	反				(外面) 黄白色 (内面) 黒色	底径 7.0
23	SD01	磁器	染付小碗	反				(内外面) 白色	底径 6.9
24	遺物包含層	縄文土器	深鉢か	反				(内外面) 灰黄褐色	底径 5.0、内外ナデ
25	遺物包含層	縄文土器	深鉢か	反				(内外面) オリーブ灰色	底径 6.8、内外ナデ
26	遺物包含層	縄文土器	深鉢か	反				(内外面) 黒色	底径 6.6、内外ナデ
27	遺物包含層	縄文土器	深鉢	反			16.0	(内外面) 黒色	磨消縄文、北白川上層式 3期。
28	遺物包含層	縄文土器	深鉢	反			18.0	(外面) 黒色 (内面) オリーブ灰色	外面ミガキ、口縁付近ヨコナデ。
29	遺物包含層	縄文土器	深鉢	反			27.2	(外面) 黒色 (内面) 灰黄褐色	磨消縄文、北白川上層式 2期。
30	遺物包含層	縄文土器	注口土器 (注口部)					(内外面) 浅黄橙色	注口口径 2.3、内外ナデ
31	遺物包含層	縄文土器	注口土器 (取手部)					(外面) 灰白色 (内面) 暗灰色	内外ナデ
32	遺物包含層	縄文土器	注口土器 (口縁部)	反			7.6	(外面) 灰白色 (内面) 灰黄褐色	底径 13.7、頸部に連続刺突。
33	遺物包含層	縄文土器	鉢 (底部)	反				(外面) 橙色 (内面) 白灰色	底径 5.0、底面網代疋痕
34	遺物包含層	縄文土器	鉢					(外面) 褐色 (内面) 浅黄褐色	沈線 6条、外面スス付着、北白川上層式 2期。
35	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 灰白色 (内面) 黒色	竹管状工具による沈線、刺突
36	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 黒色 (内面) 褐色	磨消縄文
37	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 灰白色 (内面) 褐色	内面ナデ、沈線文、刺突文
38	遺物包含層	縄文土器	鉢					(内外面) 褐色	磨消縄文、沈線 3条、刺突文、北白川上層式 3期。
39	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 灰黄褐色 (内面) 黒色	縄文、沈線、ミガキ
40	遺物包含層	縄文土器	鉢か					(内外面) 灰白色	縄文、沈線文、北白川上層式 2期。
41	遺物包含層	縄文土器	深鉢か					(外面) 黄褐色 (内面) 灰黄褐色	口縁部縄文後、沈線。
42	遺物包含層	縄文土器	鉢か					(内外面) 灰白色	内面ミガキ、外面沈線 2条
43	遺物包含層	縄文土器	鉢					(外面) 黒色 (内面) 褐色	内外面ミガキ後、外面沈線 6条
44	遺物包含層	縄文土器	鉢					(内外面) 褐色	内外面ナデ後、沈線 4条。
45	遺物包含層	縄文土器	鉢					(外面) 黄褐色 (内面) 褐色	内面ナデ、外面縄文後、沈線 2条。
46	遺物包含層	縄文土器	鉢					(内外面) 褐色	内外面ナデ後、沈線 3条。
47	遺物包含層	縄文土器	鉢					(外面) 灰白色 (内面) 褐色	内外面ミガキ後沈線 2条、沈線間刺突。上層式 2期。
48	遺物包含層	縄文土器	鉢					(外面) 褐色 (内面) 黄褐色	内外面ナデ後、沈線 3条。
49	遺物包含層	縄文土器	鉢					(内外面) 褐色	内外面ミガキ後、外面縄文後、沈線 2条。
50	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(内外面) 褐色	内外面ナデ後、口縁部に刺突文。
51	遺物包含層	縄文土器	鉢					(内外面) 灰白色	内外面条痕調整
52	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 褐色 (内面) 灰黄褐色	内外面条痕調整
53	遺物包含層	縄文土器	鉢					(外面) 褐色 (内面) 灰白色	内外面ナデ
54	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(内外面) 褐色	内外面条痕調整
55	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(内外面) 浅黄褐色	内外面条痕調整
56	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 橙褐色 (内面) 褐色	内外面ナデ
57	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 褐色 (内面) 灰白色	内外面条痕調整
58	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(内外面) 灰白色	内外面ナデ
59	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 褐色 (内面) 灰白色	内外面条痕調整
60	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 橙褐色 (内面) 褐色	内外面条痕調整
61	遺物包含層	縄文土器	深鉢					(外面) 黒色 (内面) 褐色	内外面ナデか。
62	遺物包含層	石器	磨石			6.9	4.6		157g
63	遺物包含層	石器	磨石			6.2	4.8		167g
64	遺物包含層	石器	台石		8.6	8.7	2.1		207g
65	遺物包含層	石器	剥片		3.9	4.7	1.7		25g、サヌカイト
66	遺物包含層	石器	楔形石器		4.2	4.2	2.3		36g、サヌカイト
67	遺物包含層	石器	安山岩原石		6.6	6.7	3.9		200g、サヌカイト



佐和山城跡Ⅱ次-1区 調査前状況(北東から)



佐和山城跡Ⅱ次-1区 完掘状況(東から)



佐和山城跡Ⅱ次-1区 SK01 完掘状況(東から)



佐和山城跡Ⅱ次-1区 SK02 完掘状況(東から)



佐和山城跡Ⅱ次-2区 調査前状況(北東から)



佐和山城跡Ⅱ次-2区 完掘状況(東から)



佐和山城跡Ⅱ次-2区 柱根検出状況(東から)



佐和山城跡Ⅱ次-2区 流木出土状況(西から)



六反田遺跡 I 次 調査前状況 (南西から)



六反田遺跡 I 次 完掘状況 (南西から)



六反田遺跡 I 次 SD01 完掘状況 (北から)



六反田遺跡 I 次 SD01 土層断面 (南から)



六反田遺跡 I 次 SK01 半裁状況 (南西から)



六反田遺跡 I 次 SK01 遺物出土状況 (西から)



六反田遺跡 I 次 SK01・SC01 完掘状況(北から)



六反田遺跡 I 次 SC01 土層断面(南から)

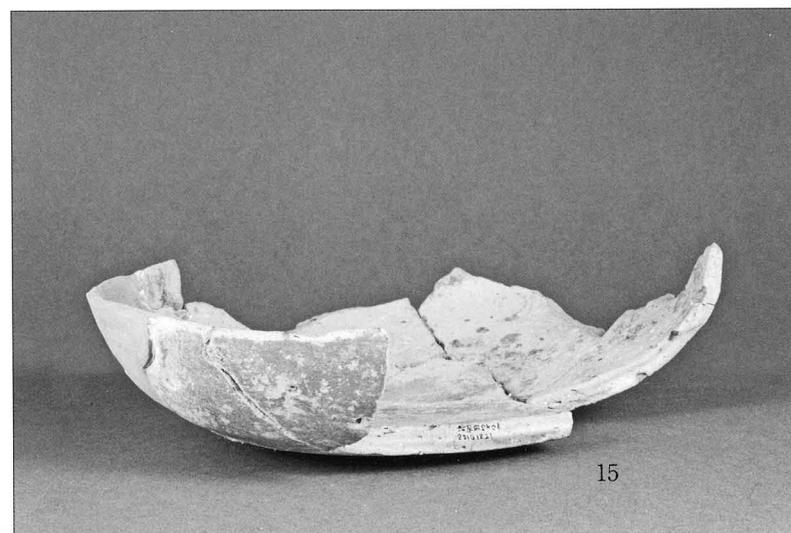
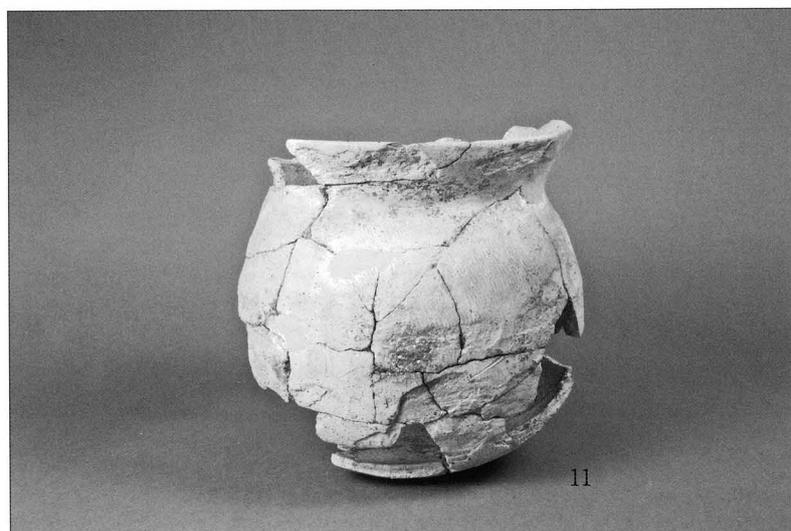
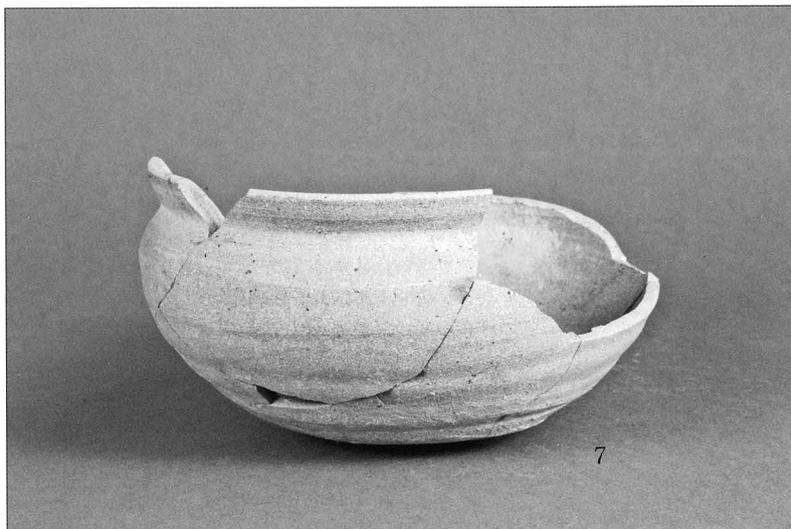


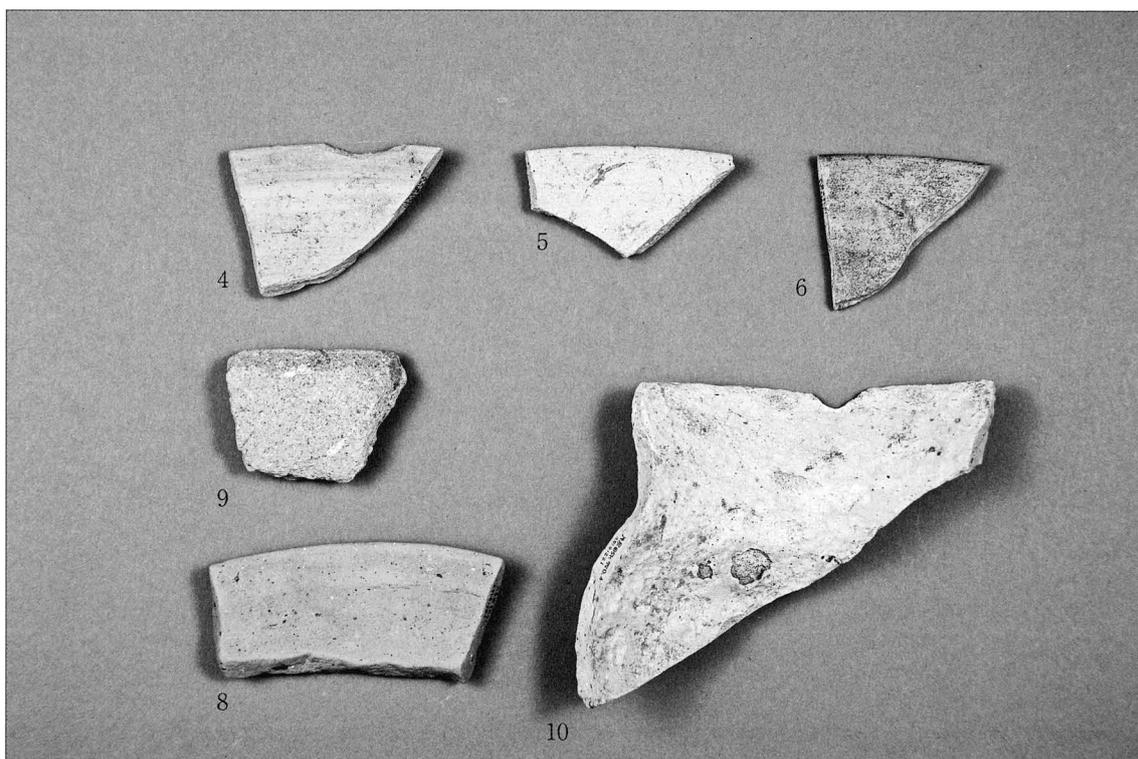
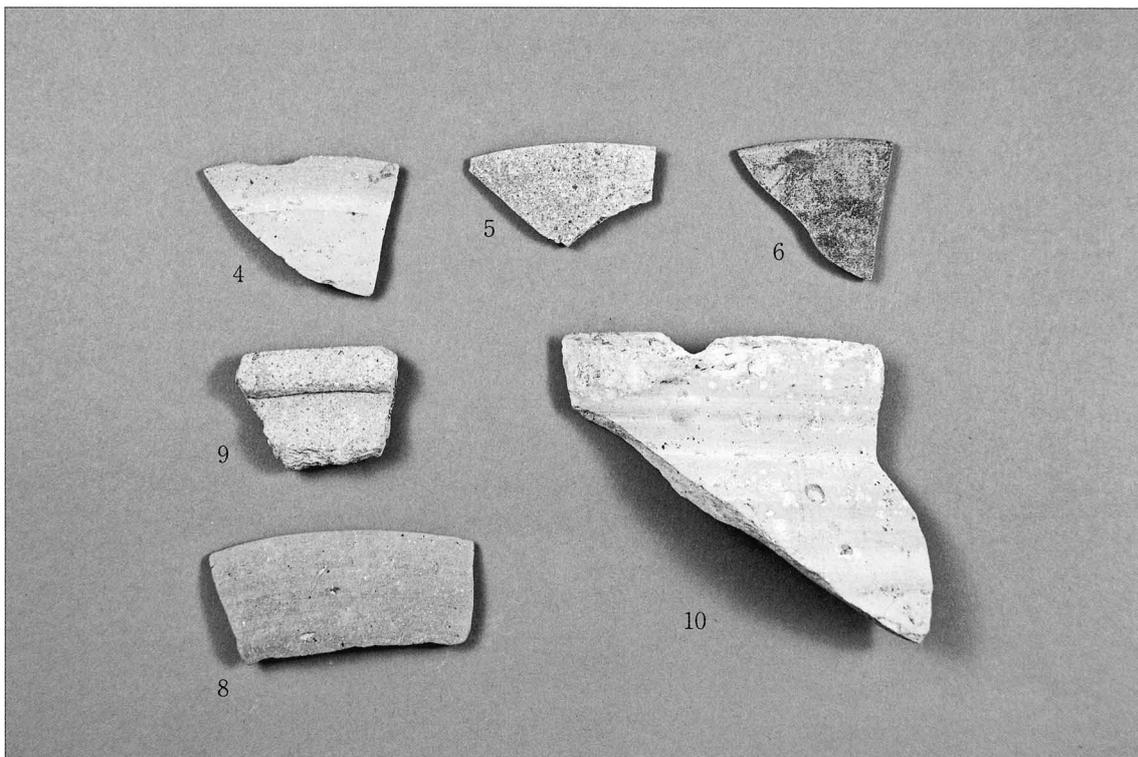
六反田遺跡 I 次 SCO1 土層断面 (西から)

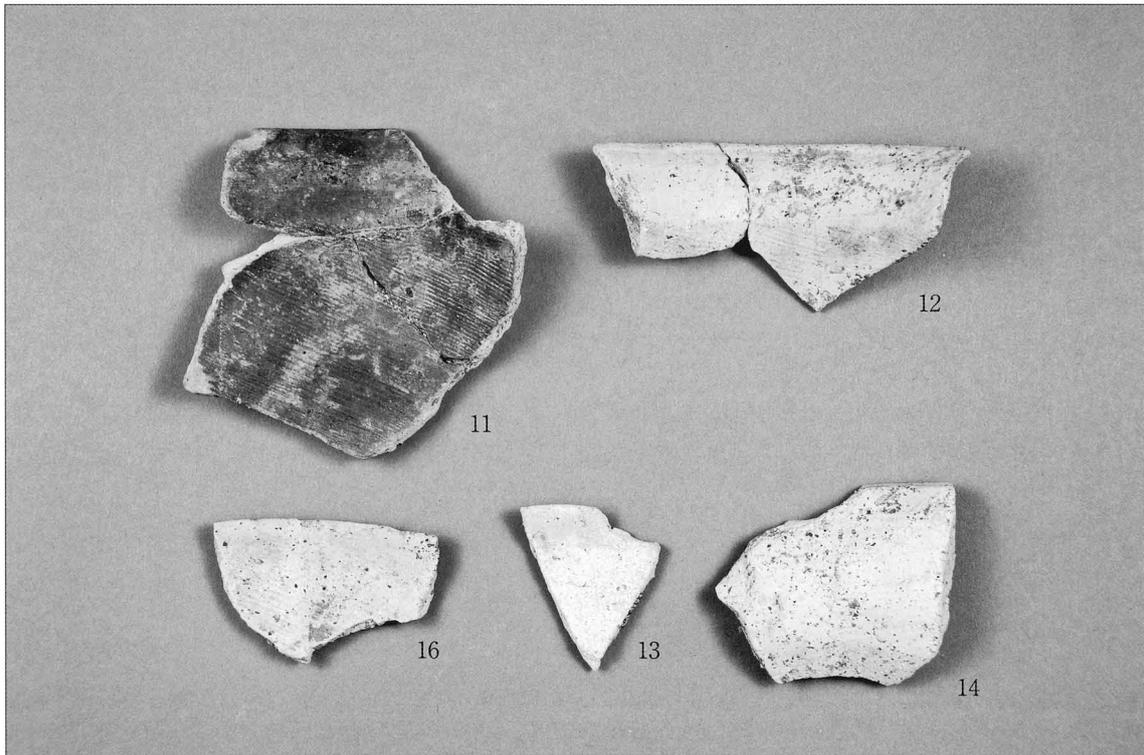
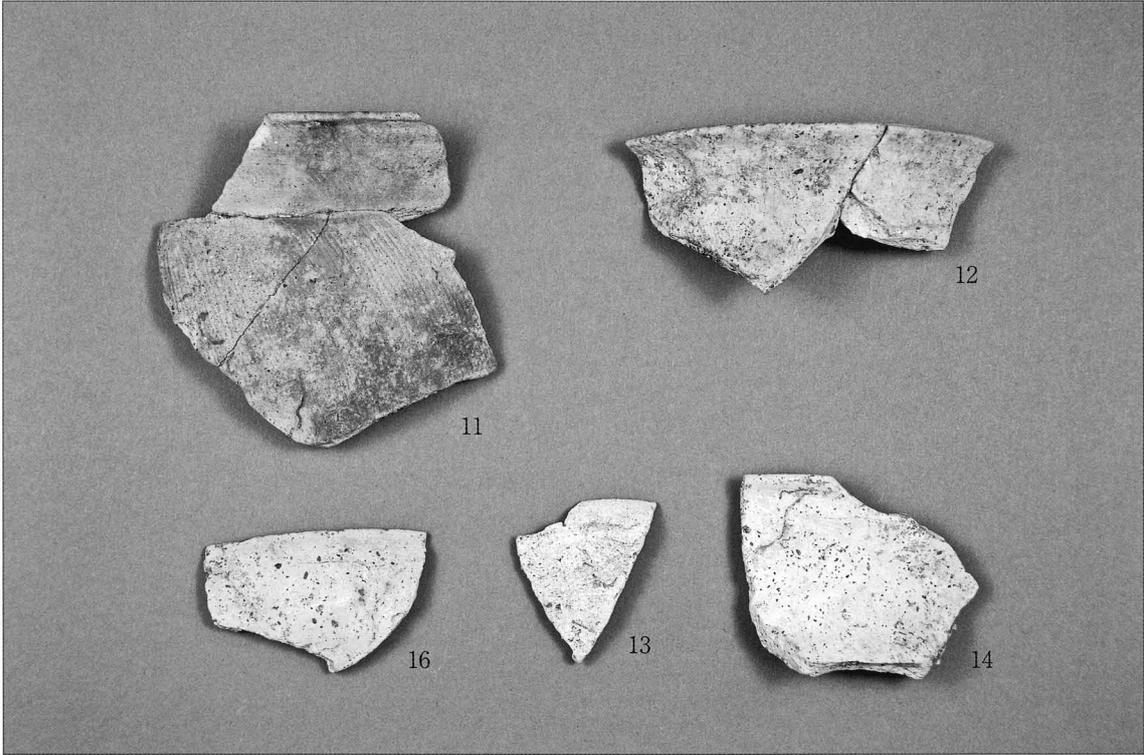


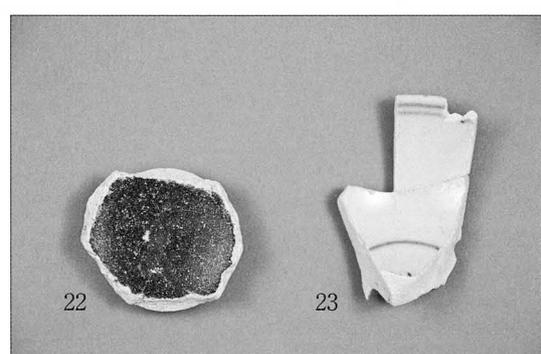
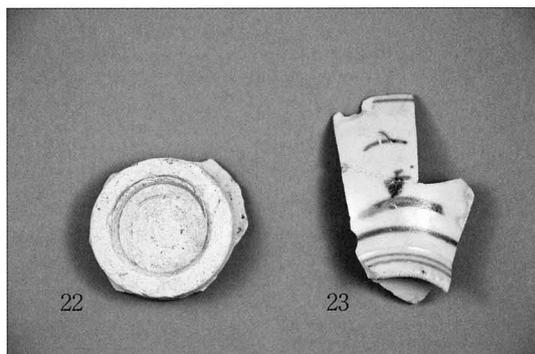
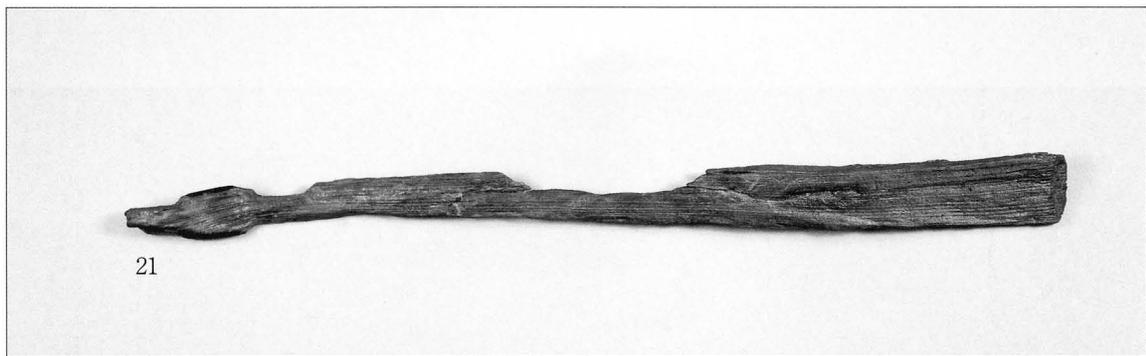
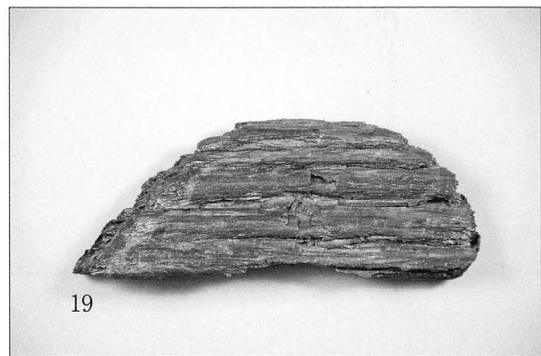
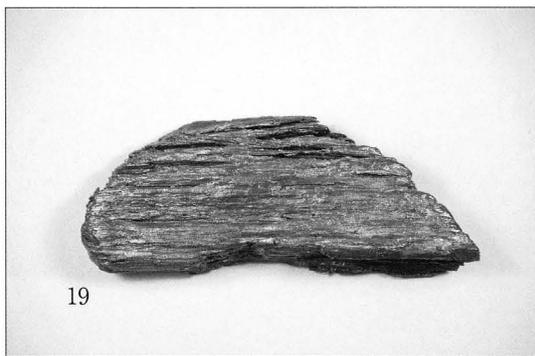
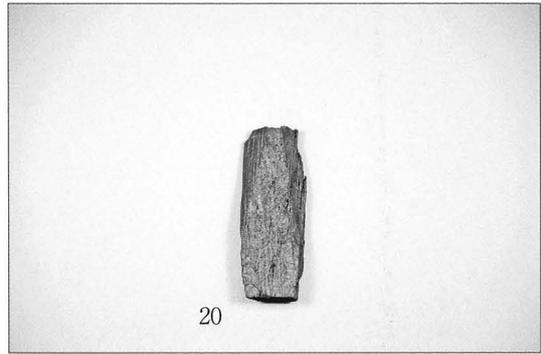
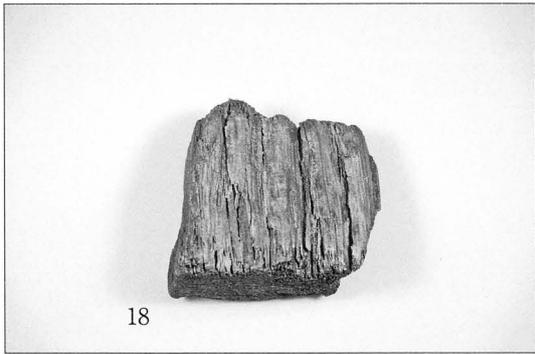
六反田遺跡 I 次 包含層 (南から)

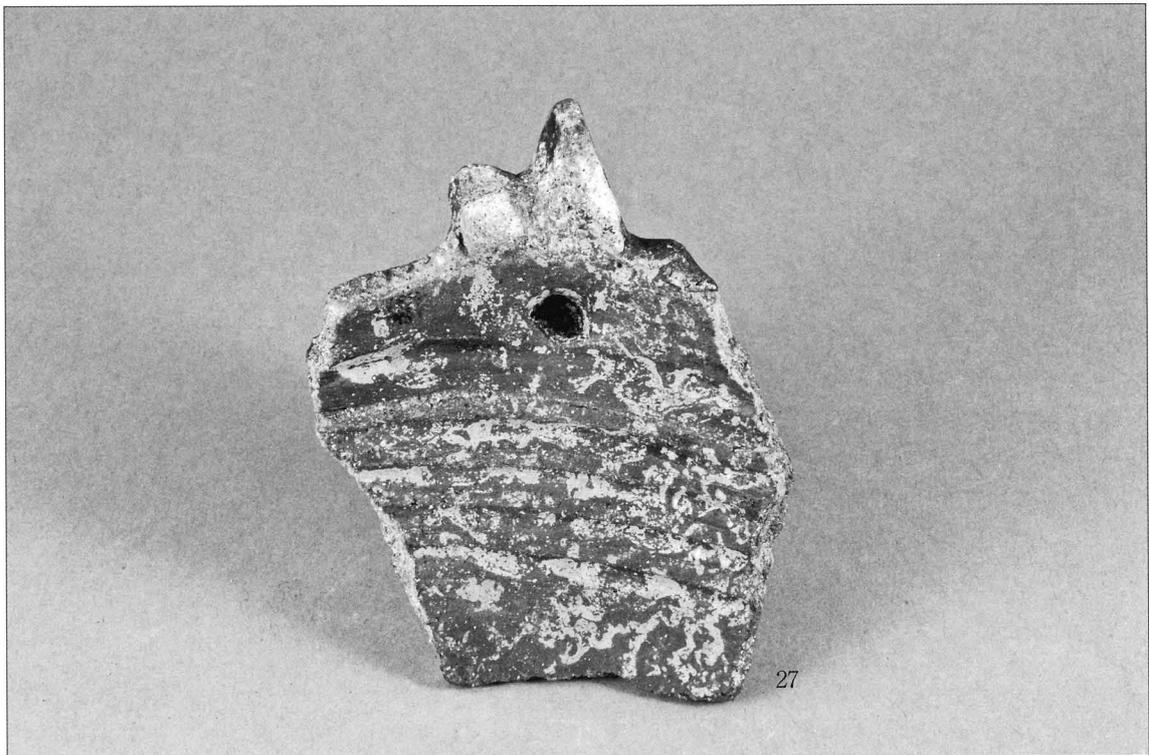


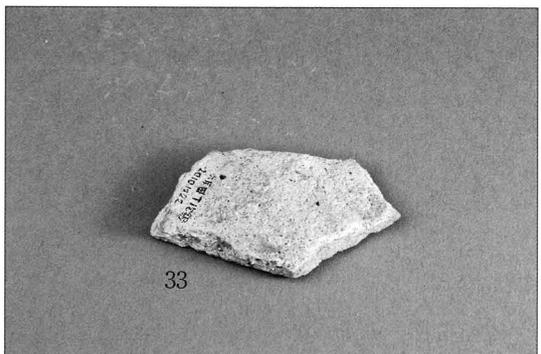
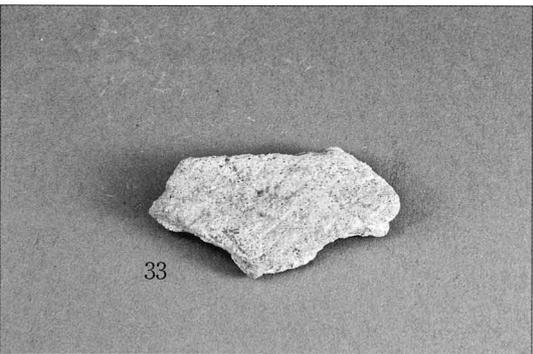
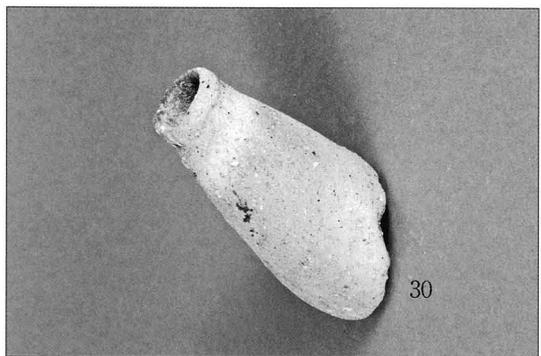
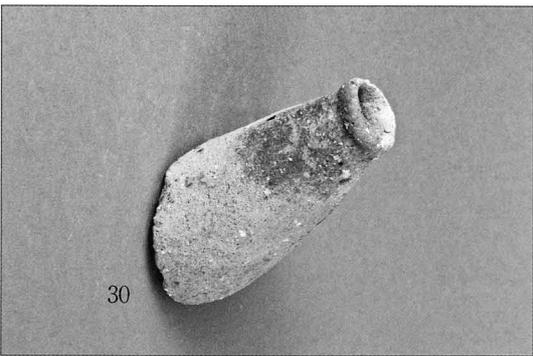
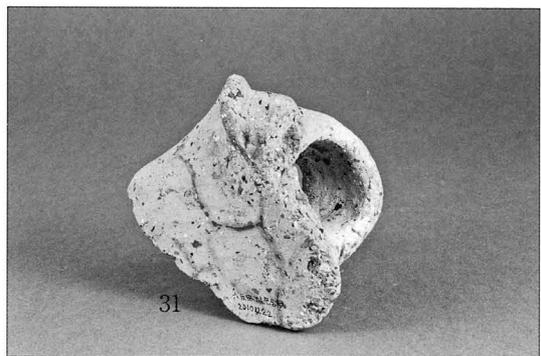
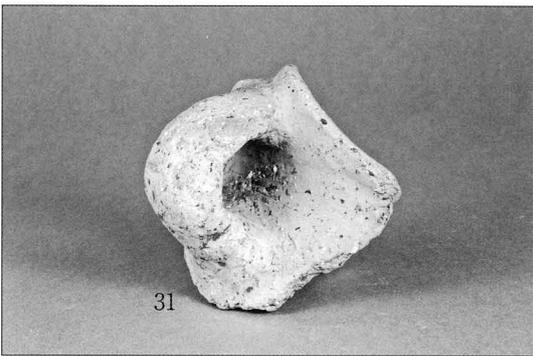
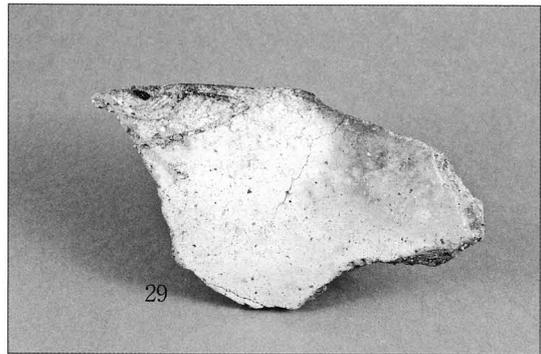
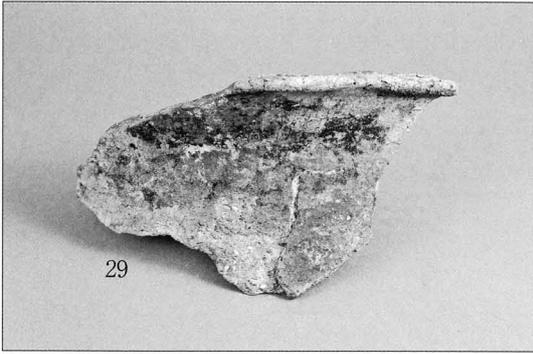


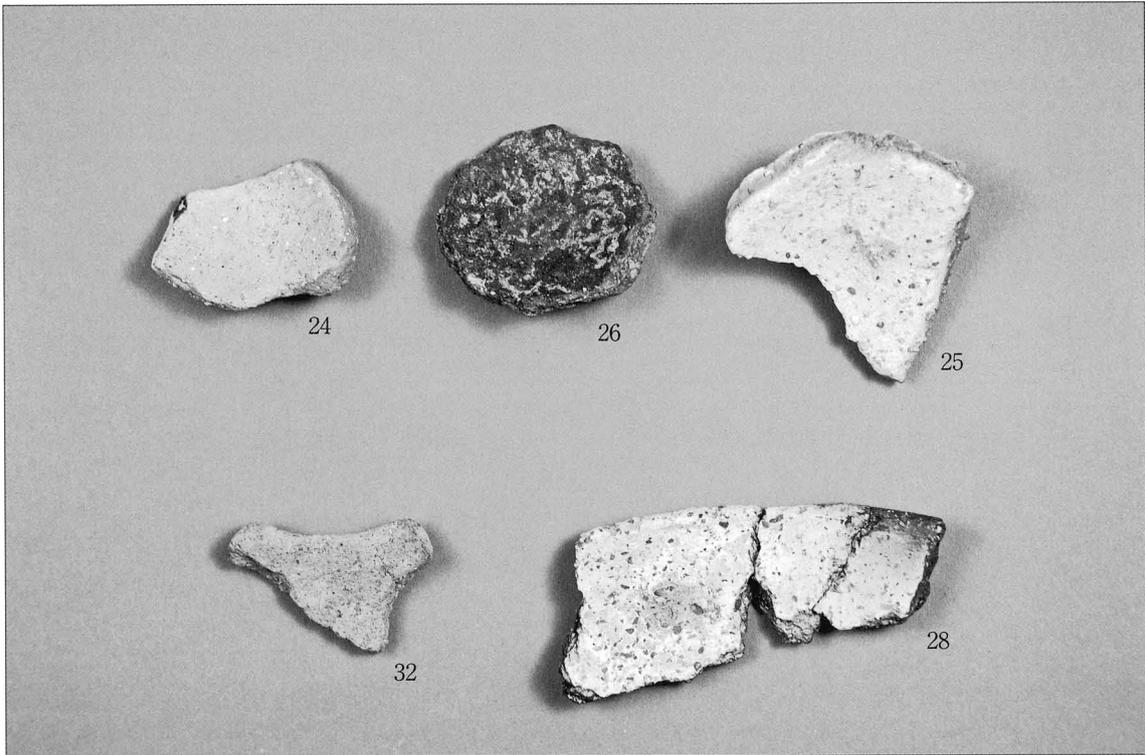
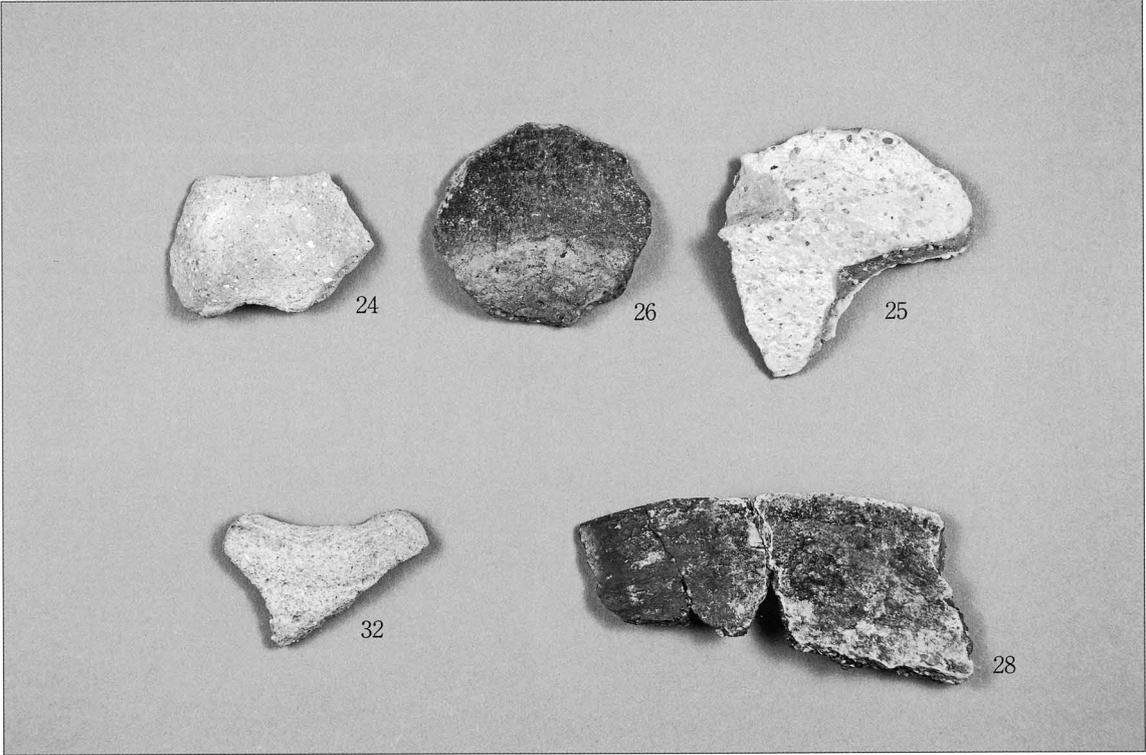


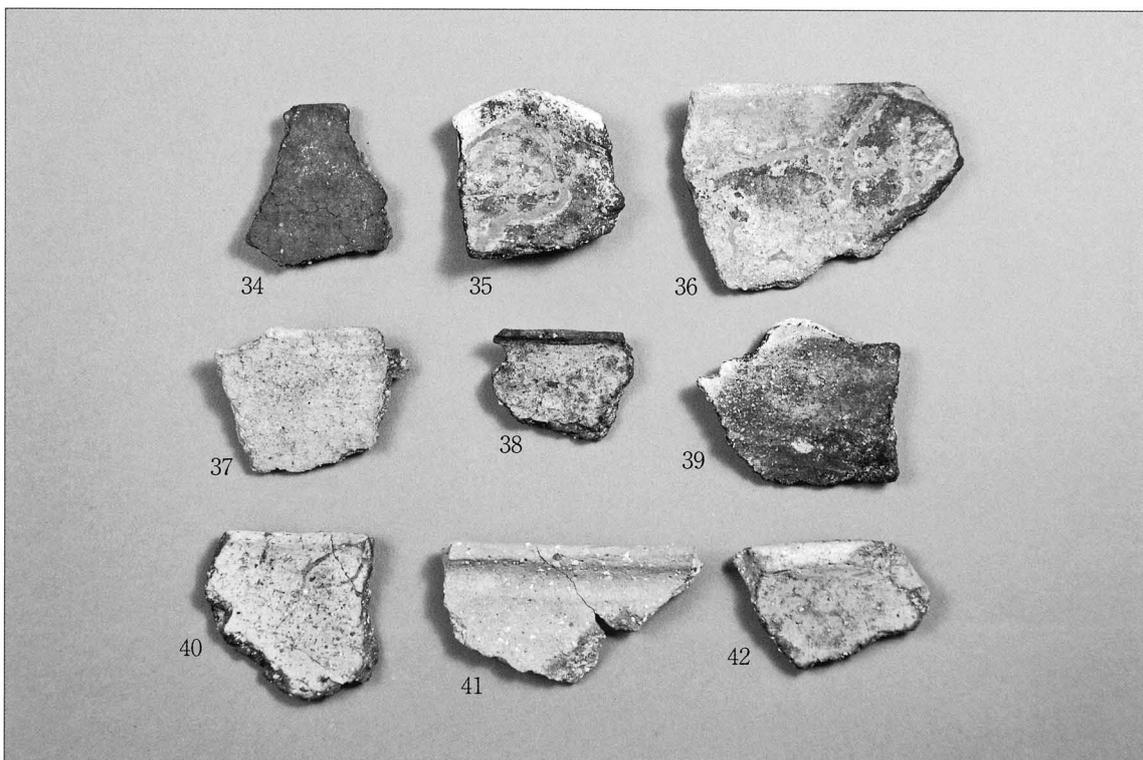
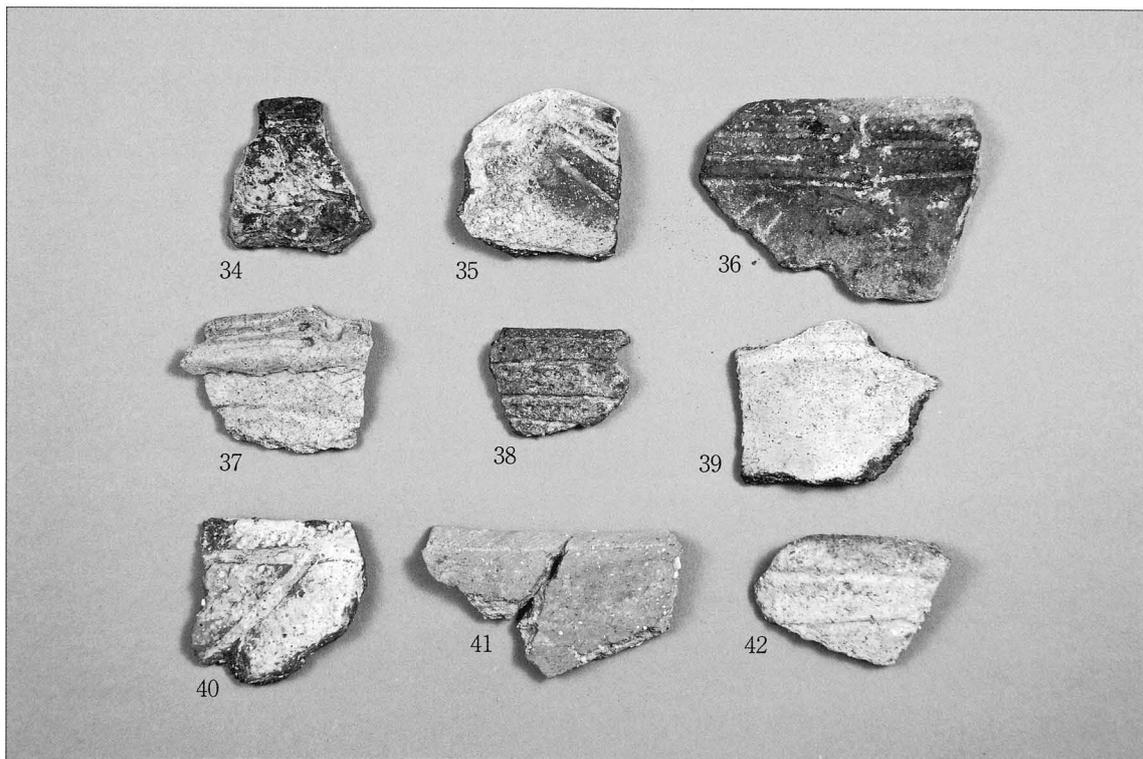


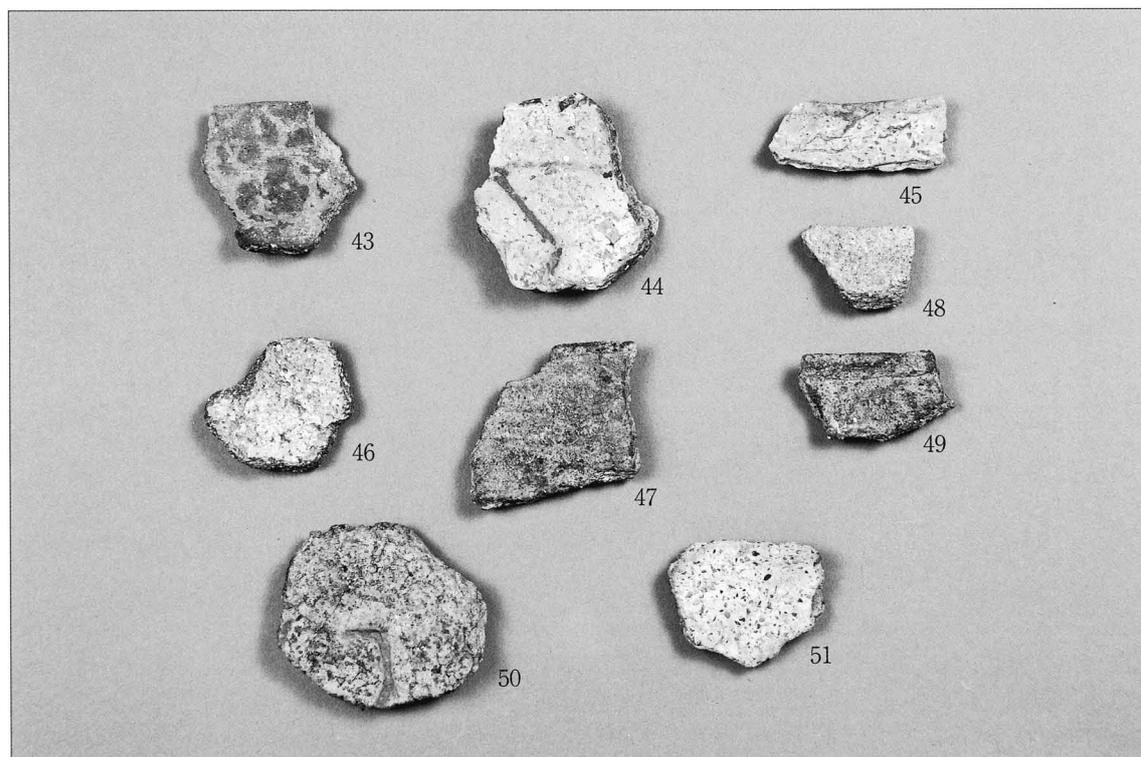
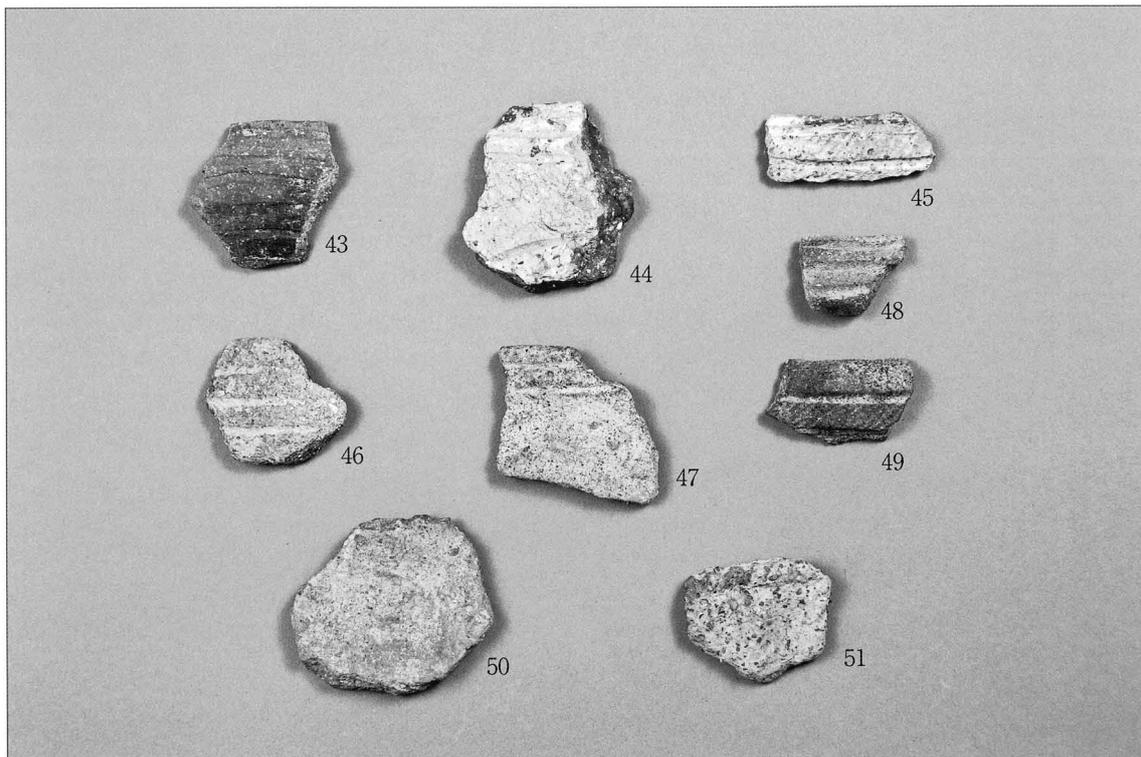


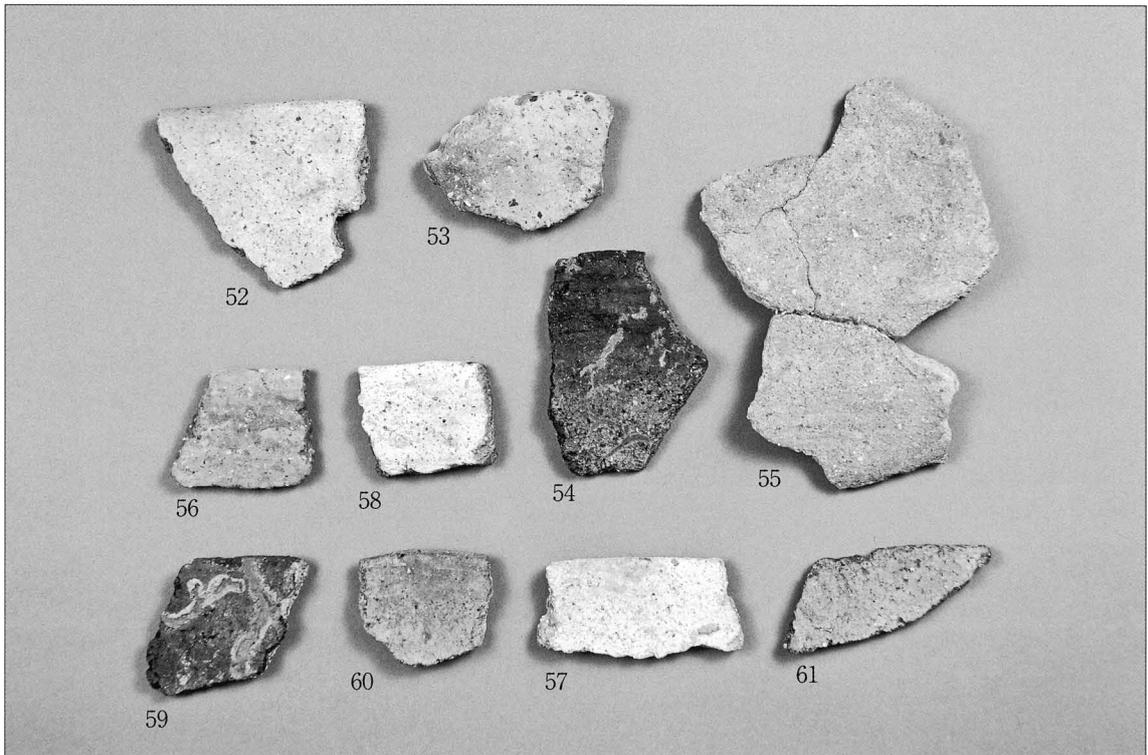
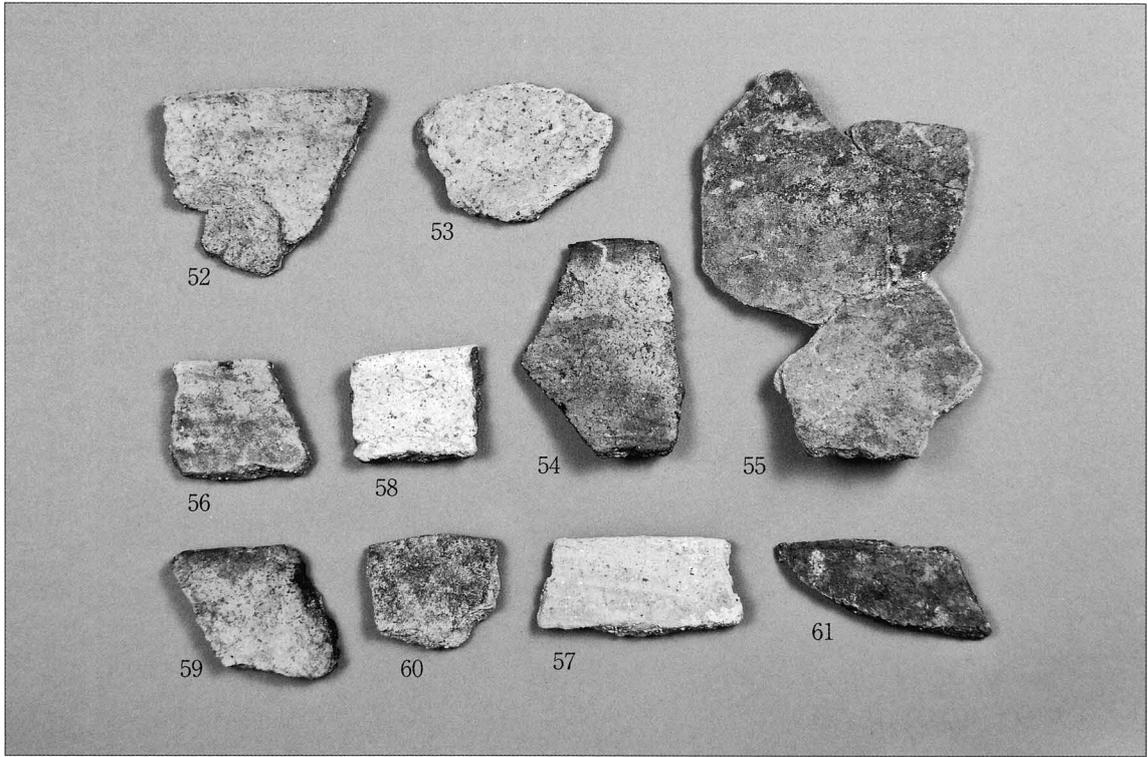


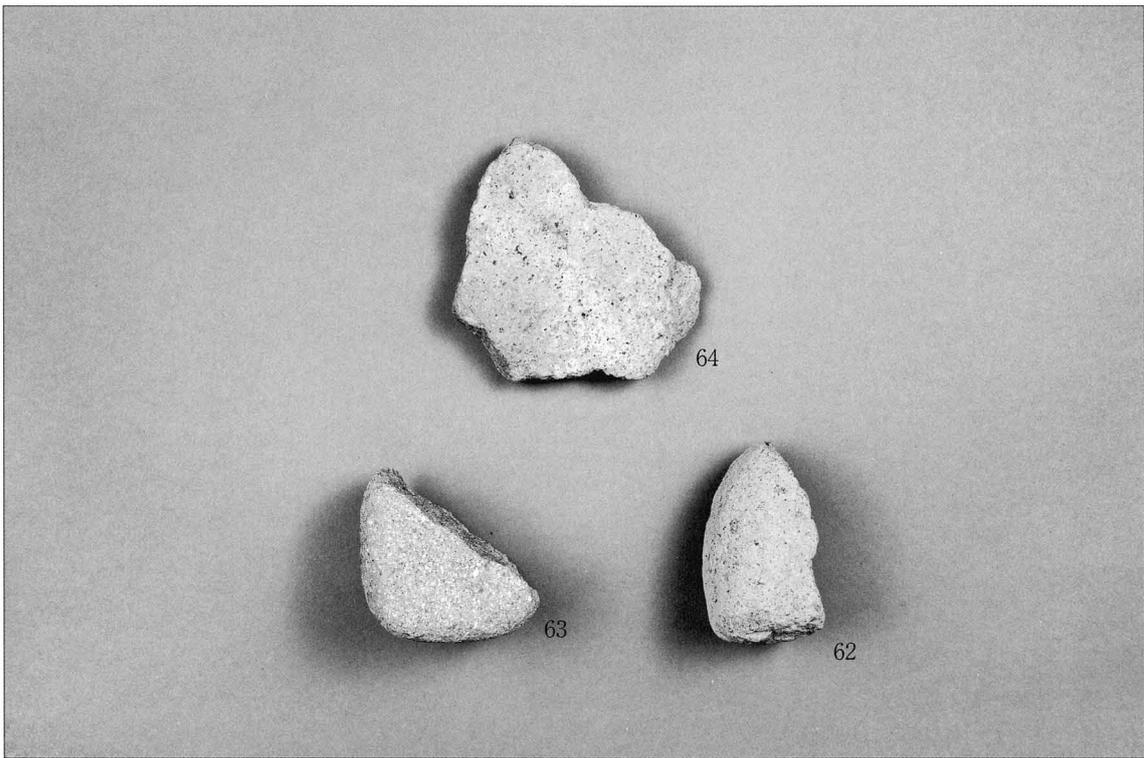
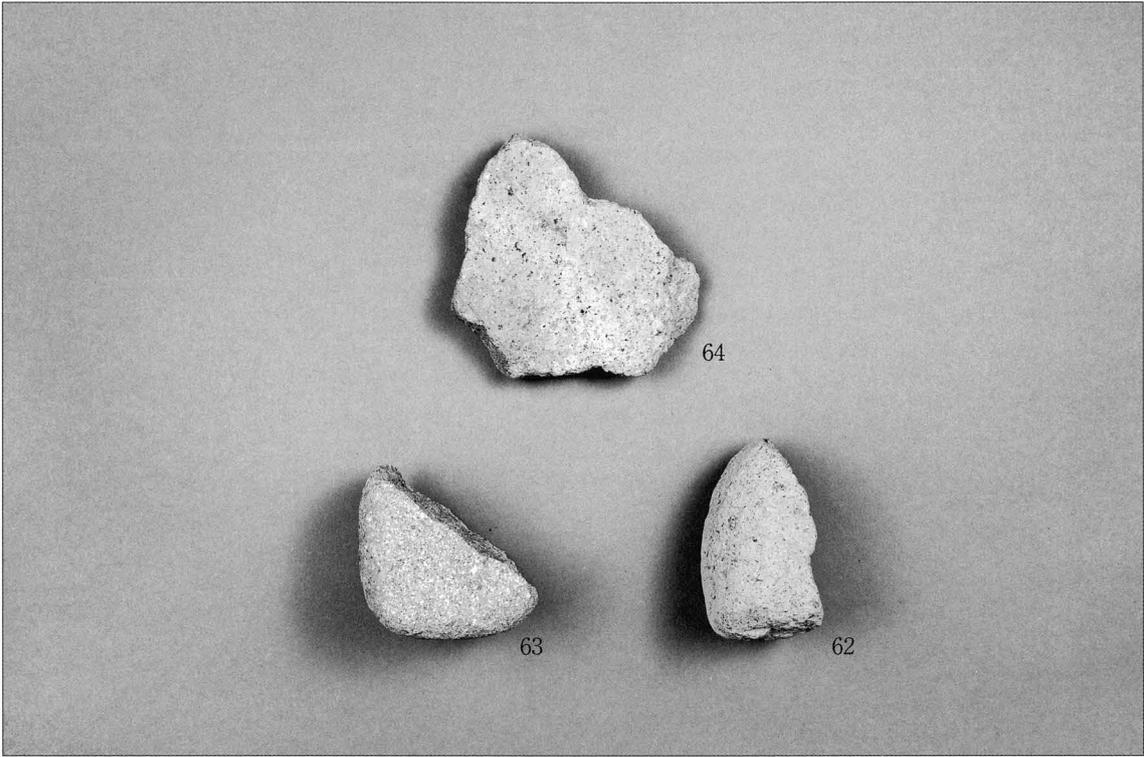


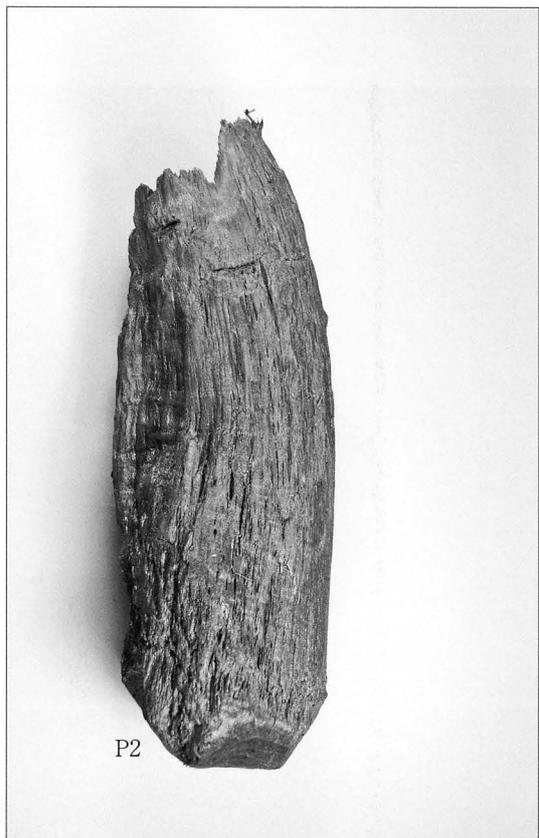
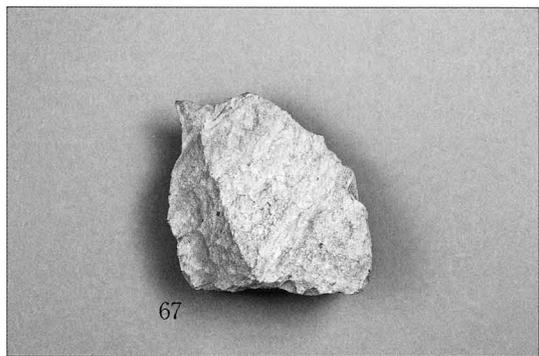
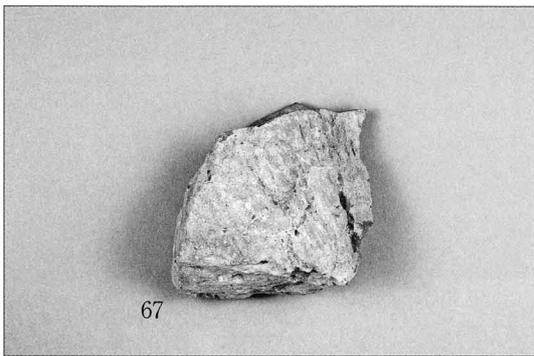
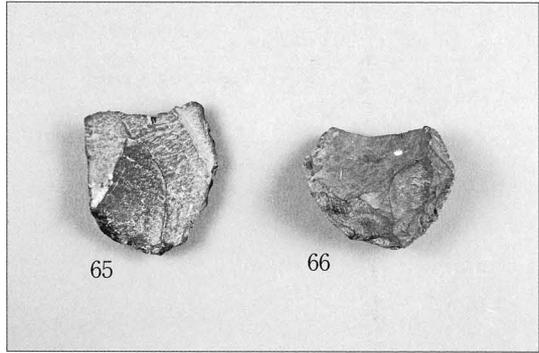
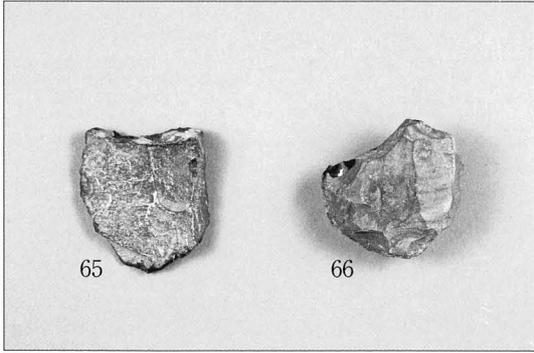












報告書抄録

ふりがな	さわやまじょうあとⅡ・ろくたんだいせきⅠ
書名	佐和山城跡Ⅱ・六反田遺跡Ⅰ
副書名	鉄塔建替工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	50
編著者名	田中良輔
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL 0749-26-5833
発行年月日	20120229

しよしゅういせき 所収遺跡	しよざいち 所在地	コード		世界測地系		調査 面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
佐和山城跡	ひこねし 彦根市 さわやまじょう 佐和山町 地先	25202	090	35度 16分 57秒	136度 16分 36秒	298.25 m ²	20101206 ～ 20110112	関西電力 鉄塔建替 工事。
六反田遺跡	みやたちょう 宮田町 地先	25202	079	35度 17分 17秒	136度 16分 37秒			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐和山城跡	城館跡	中世	掘立柱建物 土坑	柱根	
六反田遺跡	集落跡	縄文後期 古代	包含層 土坑	縄文土器 須恵器等	北白川上層式2期～3期 7世紀中頃～後半

彦根市埋蔵文化財調査報告第50集
佐和山城跡Ⅱ・六反田遺跡Ⅰ
 —鉄塔建替工事に伴う発掘調査—
 平成24年(2012年)2月発行
 編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
 彦根市尾末町1番38号
 TEL 0749-26-5833
 印刷・製本：ニホン美術印刷株式会社
 大垣市西外側町2-15

**SITE OF SAWAYAMA-JYO
&
SITE OF ROKUTANDA**

February, 2012

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division